

約一時間続いた後、彼は会議終了を宣言し、そのとき、学生の覃廷多ら四人がそれぞれ棍棒を持って、黄副校長を会場から連れ出し、電話室前まで連れて行き、覃が殴れと命令した。棍棒は彼を目掛けて乱打され、とうとう殴殺した。

黄副校長の人肉は、人間の教育と人材を育成する場所で、すっかり削ぎ取って持ち去られ、最後は人骨しか残らなかったという。まことに恐ろしい光景が出現したのであった。

黄副校長は、中華人民共和国樹立前、かつて中国共産党が指導した革命に参加し、121大隊第一中隊の政治指導員をやったことがあり、広西中部支隊第十八大隊長を務めたこともあった。広西が解放された後、広西蒼梧県第一副県長、桐嶺中学副校長などの要職を務めたのだが、文革当時、そのような形で殺害されたとは、これ以上、痛ましいことはないだろう。

前柳州地区教育局の文革処理組工作組長、前武宣中学校校長の呉宏泰は、私にこの事件について詳しく語ってくれた。

黄副校長は大地主出身で、一九四七年、ゲリラ活動に参加し、解放後、蒼梧県副県長を務めたが、一九五四年、広西秘密党部を再編するとき、彼には裏切り行為があるとされ、除名処分となり、一般幹部に降格となった。そして、十数年の再審査を受けてから、文革前にやっと党籍が回復され、武宣県桐嶺中学副校長に返り咲いたのである。

しかし、彼は文革中、また裏切り者と決めつけられ、残酷な批判闘争を受けた。紅衛兵の指導

者たちは糾弾集会の前に、彼を打倒することを決めていた。集会後、彼は宿舍に連れもどされる途中、棍棒で殴り倒された。

宿舍に担ぎ込まれる途中、死亡したのだった。翌日午前八時、遺体は運動場の木の下まで担いで運ばれて、『毛沢東語録』を読み上げられたあと、そのまま、見せしめのためのさらしものにされたのだった。

やがて、人肉削ぎが始まり、だれが最初に彼を切ったのか、諸説紛々いろんな説があるが、大多数の証言によると、当時、女子学生の紅衛兵・覃柳芳が最初に人肉を削いだようだ。彼女は、黄副校長の息子と恋愛関係にあり、彼女は自分の立場をはっきりさせるために、人肉を取る行動に走ったらしい。

彼女はまた、もう一人の学生の名前を告白した。黄佩農である。彼は、最初に肝を切り取ったのだった。さらにもう一人の女子学生・陳香姣は、彼女の母が病気なので、人肉は薬になるとし、だから母のために、校長の人肉を切ったという。彼女の話によると、もう一人の年寄りともう一人の女子学生のためにも人肉を削ぎ取った。黄副校長は裏切り者で、人肉を削ぎ取ってしまうのは当たり前のことだという。

彼女の証言によると、自分と甘栗英らが見たところでは、黄佩農は肝を下げて、近くの田んぼまで行って、水で洗い、その後、肝を炊事場まで持っていったようだという。また多くのクラ

スメートも同じく人肉を切り取って、食堂まで走っていったという。

黄佩農が肝を切り取ったことを見た証人は、一人だけではない。もう一人の証人・覃世新もそう証言した。私ははつきりと、黄佩農が刀で黄副校長の腹の上を一文字に切り裂き、力いっぱい足で踏み、肝が出たので、切り取って持って行って、煮て食べた——と。

惜しいことには、これらの証言は、決して覃柳芳が率先して校長の肉を切ったことの証明にはならなかった。そこで説明しなければならぬのは、覃柳芳とは元の名前で、その後、張繼峯と名前を変えたことだ。彼女が改名したのは、共産主義の戦士、雷鋒を崇拜するためかどうか知らない。あるいは、彼女の非凡な革命の精神を表現するものかもしれない。

風見鶏、日和見主義者は、風向きを見るのは早い。しかし、自分の未来の義理の父の肉まで切つて、自分の立場をはつきりさせなければならぬとは、どうしても理解できない。

《人肉宴会》——副校長の肉を食べ、酒を飲んだ教師たち

しかし、私の想像力が大きな挑戦を受けたのは、学校教師たちまでが大々的に人肉を食べたことだろう。桐嶺中学校の黄大晃総務は、こういう証言を話してくれた。

……七月二日昼ごろ、私は生物学教師・謝雄標の部屋の中で人肉を煮ているのを目撃した。

彼はみずから人肉を切り、煮て、料理ができ上がると、国語教師・施振徳がひとときの人肉を手でつまんで味見をした。人肉と豚肉と一緒に煮ているようだ。それ以外にも、一部の人が《人肉宴会》に参加し、食べながら酒も飲んでいった。

生物学教師の謝先生の弁明によると、当時は、ある学生がひとときの干した人肉を渡してくれて「先生は胃病があるので、これを食べると絶対治る」と勧められ、人肉を食べたのだそうだ。教師たちは、それぞれ人肉を食べた自分の理由を提出することもできよう。生物学教師は、人肉とその他の哺乳動物の肉が本質的には決して区別はできないと弁明するに違いない。国語教師も革命的ロマン主義の権利をみずから体験した、革命的ロマン主義の権利だと証言できるかもしれない。

しかし、知識は残虐を克服することはできない。中国の知識分子には、忠君愛国の土はそれほど少なくはなかったといえども、決して人道主義の理想のために身を捧げる殉道者はいなかった。歴史は蒙昧な沈黙者を許すことはできても、しかし、歴史は決して《人肉宴会》の席上で一杯の酒を飲んだ知識分子を許すことはできない。

この日の桐嶺中学校は、人肉料理をつくるのに忙しく、賑やかな光景が見られた。

厨房で人肉を煮たり、教員宿舎で人肉を煮たり、女子学生宿舎でも人肉料理をつくっている。教室の廊下で人肉を焼いたり、校内で人肉を焼いたり、臨時的につくられた二つのレンガの上に瓦をのせたかまど、自家製作の即席かまどで人肉を焼いているのが目撃されたのである。

政府側の資料でさえ、こう書いている。「七月二日、桐嶺中学校の厨房のまわり、宿舎の縁の下など、人の肝、人の肉を焼く状況は、いたるところで見られた。いたるところが血だらけで、臭気が、なまぐさい匂いが漂い、煙がもうもうと出て、焦げた匂いが充満し、恐ろしい状況が人の度胆を抜いた」

副校長は心臓、肝臓から性器まで削ぎ取られた

人肉を食うことができなかつたのは、四人の黒いグループと言われた教師だけである。教師たちは、たった二つの小さな竹かごに黄副校長の遺骨を入れ、牛の骨を担ぐように集めて埋葬した。この四人の一人である語文学教育研究組組長・周樹榮教師が、以下のような証言をした。

……七月二日午後五時、われわれ四人が呼ばれ、遺骨収集に行った。黄副校長の遺骨は運動場近くのかわやのそばに置いてあったので、二つの竹かごだけでそれを全部入れた。頭は殴られ、真っ黒にはれ上がり、大腿骨とすね、そして手の肉は全部、切り取られ、肝、心臓、性器もすべてとられ、胸部は空っぽで、はらわたも流れ出していた。われわれは涙をこらえて、おじおじしながら竹かごを担いで、埋葬に行った。

——呉宏泰および武宣県の政府、民間の方々の協力で、私は黄副校長虐殺事件についてほぼ理解ができた。しかし、私は相変わらず、より多くの状況、ことに、なぜこの老ゲリラ隊員が裏切

り者と決めつけられ、彼はいったいどこいうところが許されてはならないことなのか、彼はいったいどういうような人間であるかということについて、もっと知りたかった。だから、私が二回目に、広西省をまた訪れたとき、私と妻の二人はわざわざ南寧広西民族教育出版社まで行って、黄副校長の二番目の息子・黄啓周を訪ねた。

彼はわざわざ、われわれを編集部から彼の家まで連れて帰って、お茶とたばこを出してくれながら、あまりしゃべらなかつた。われわれは二年前に武宣県を訪ねたことを話し、彼に語られるように願った。しかし、彼はゆっくりウリの種をかじりながら、あまりしゃべらないどころか、沈黙しつづけ、何も語らなかつた。

彼は、今晚、われわれの泊まっているホテルに行くから、そこでゆっくり話をしましょうと言った。後でわれわれがやっとわかつたのは、じつは家で過去の父親の話をしたくなかつたのだ。なぜならば、母親が昔の悲しい事件を思い出すことを心配したからである。またもう一つ、彼は一人の編集者として、職業柄か、あまりにもその事実を知りつくしていたからか、文学に対して、あるいは新聞に対しても、それは中国では恥じるべき職業だということを、知っていたからかもしれない。

彼は根本的に話だけでは何の意味もないことを知っていたのだ。

彼はその夜オートバイに乗って、約束どおりにホテルまで訪ねてきた。彼の最初の言葉は、話

をしても何の得があるのか——というものだった。彼は七二年以来、毎年かならず共産党中央に手紙を書き、徹底的に彼の父親の生前と死後のことをはっきりさせることを要求したが、何の返事もなかったからだだった。

私と妻の二人は、重ねて話をしてくれるように説得すると、彼はついに、淡々として冷静に父親と自分のことについて話し始めた。

副校長は人民とともに二十年間闘争し、裏切られた

……私の父親は理想主義者の一人で、日中戦争の初めごろ、三八年、三九年は租税軽減運動に参加した。父親は貧しい農民に同情し、故郷で大地主との闘争を続け、農民の負担軽減のために闘った。一九四五年、父親は、ほかの二人の仲間と一緒に故郷の通挽市場で、書店を開き、重慶の『新華日報』と連絡をとっていた。その当時、彼は年齢がいちばん上で、みんなは彼をリーダーに推した。そのうちの一人甘徳頌は秘密黨員で、父親は、革命宣伝をやらずに村の農民を組織して、撤退する日本兵を待ち伏せして狙撃した。

一九四七年、廖連原は延安から広西に来て、貴県の「中秋暴動」を組織した。父親は、通挽から一部の人間を連れてきて、「中秋暴動」に参加した。当時、衛華葉が中隊長で、父親は副隊長。あの秘密黨員の甘徳頌は指導員である。彼らは太平天国の猛将の石達開の名をとって自称

「達開部隊」と言った。広西省では、敵が強く、われわれは弱かった。数カ月後、戦闘に負けてばらばらになった。父は、一部のゲリラ隊員を連れて、故郷の立志村付近から二、三キロ離れたところの、ある大きな洞窟の中に隠れた。洞窟の中には当時、数十名の農民と一緒に隠れていた。それ以外にも近くのいくつかの村には、数十万斤の食糧をも隠していた。もちろん、豚や牛などの家畜も洞窟の中で飼育していた。洞窟には入口が二つがあつて、国民党軍は、どうしても攻め込むことができなかった。そこで、爆薬で、洞窟を爆破しようとした。

父親は洞窟を守って、農民たちを援護したが、みずから敵一人を殺した。敵はとうがらしを焼き、その煙でいぶり出そうとしていた。目が煙で痛くなり見えなくなつた。ゲリラ隊員は、別の出口から撤退して森の中に隠れていた。この洞窟は、かなり大きかった。上下二層に分けられ、なかには、七、八十人の村民が隠れていた。国民党軍はこの数十人の村民を包囲して人質にして、父親たちに投降と、銃器を渡すことを要求した。父親は、やむを得ず、この数十人の村民の安全のために、洞窟から出て武器を渡した。

私はここまで話を聞いて、逆に彼に聞いた。「いわゆる裏切り者という歴史的問題というのは、そのときの武器を渡したことを指して言うのではないですか」と。彼は「そうです」と答えた。私は理解した。もし、あなたの父親が農民たちの死活問題を考えずに最後まで戦ったら、おそらく全員が殺害されるであろう——ということ、私は、黄副校長に何か裏切り行為があつて、そ

れで一生涯、糾弾されているのかと思っていた。しかし事實は全く逆である。彼は一人の強い革命的な信念を持ち、また人間味も豊かな人物だったのである。

彼は、人民たちとともに闘争したが、二十年後、逆にこれらの人たちから迫害を受けたのだ。これは、歴史の過ちであろうか。それとも、これは暴力革命のロジックではないだろうか。たしかに、もし黄副校長が徹底的に最後まで戦ったら、あるいはまわりの命を顧みずに徹底抗戦し、最後まで血を流したら、それでも生き抜けば英雄になり、死んでも烈士になるだろう。党は彼のために誇りを感じ、人民は自分たちが払った代償がいかに高いかを忘れて、毎年の清明節に、毎年の墓参りに、あの罪のない人たちの子弟たちが、烈士たちの霊園に花輪を捧げるに違いない。また、懐かしい歌を歌うかもしれない。黄家凭は、決して無実な被害者ではなくて、一人の人道主義の理想のための殉教者であったのだ。彼に明確な理論的自覚がなくても、歴史はそれ以外に彼を裁判することはできない。

黄啓周は、しばらく黙ってから、また淡々と述べ続けた。

私の父親が投降したといっても、決して同志たちを裏切つてはいなかったのではないか。組織に危険や損害を与えなかったのではないか。私の父親は、すぐに来賓県まで逃避して隠れ、二、三カ月たってから貴県石竜鎮で、再び新しいグループを集めて、貴県の貴、来賓県の来、武宣県の武の三つの字を取って、貴来武解放工作委員会を結成した。父は武装委員になり、やがて父と

もう一人の同志と一緒に党の指導のもとで再び新しい闘争を展開している。

父親の家は、党の秘密拠点の一つであった。食糧と家財道具は、すべて洞窟の中で消失したので、暮らしはとても苦しかった。あるとき、父はグループを連れて村に帰ったが、食糧がなかった。母親の結婚当時の嫁入り道具の一つである靴を売って食糧に換えたほどだ。

一九四九年一月、廖運原は、中国共産党華南局と連絡をつなぎ、このゲリラ隊を桂中分隊と名づけ、父親は特別中隊中隊長、今の連隊長に相当する職を務めた。また、一九四九年八、九月ごろ、父親は特別中隊をつれて桂林東部地区に派遣された。しかし国民党政権が間もなく倒れても、同地区はどうしても父親を放そうとしなかったが、やがて蒼梧県の副県長・兼全県民兵大隊政務委員を務めている。

一九五四年、中央から広東、広西両地方の秘密党組織の再編が行なわれた。実質的にはそれは一つの奪権闘争であった。父親はあの投降問題で責任が問われ、党から除名処分された。しかし、一九六六年になってから、父親の党籍回復となり、やがと副校長になったのだ。

文革は、その直後にやってきた。あなたの掌握した資料は、その後のことについて、私よりも詳しいかもしれない。もう、これ以上は言うことはない――。

『私の息子は生涯、共産党とともに歩んだ』

啓文、啓玲兄妹と同じように、黄啓周もあのもっとも血なまぐさい過去の惨劇については話さなかつた。私の要求に応じて、自分のことについても話したが、きわめて簡単な話であつた。文革の初めごろ、彼は紅衛兵に参加していた。参加したのは、小派の「四・二二」グループに所属していた。一九六七年、武漢の七・二〇事件後、彼は、文革が共産党上層部の権力闘争であることに気づいた。考えれば考えるほど、人に利用されているような気がしたという。そのとき、彼は父親になるべく逃避したほうがいいと勧めている。父親は、かつてゲリラ活動をしたところに二カ月間逃避して、また帰ってきた。

父親から考えれば、彼はもともと党幹部であり、党員でもある。群衆運動から逃避してはいけない。それ以外にも理由がある。というのは、給料をもらえないので、逃げても生きていくことはできないからだつた。

しかし、啓周はきつぱり小派紅衛兵グループから離れ、家に帰ってレンガをつくつた。彼の推定では、父親が運動が下火になつたら、かならずいろいろなことを片づけて家に帰ってくるに違いない。そのとき父親はまだいくらか給料をもらっているのだから、彼はその間を利用して、レンガをつくり、家をつくろう、そうしなければ帰ってきて住む家がないと考えた。だが、情勢はだんだん緊迫し、悪化してきた。四・二二グループは各地で殺害されている。彼は南寧市の上の兄の

ところに一カ月間、隠れていたという。

県革命委員会が成立した後、父親から手紙が来て、私に学校に帰って闘争批判改造の運動を勧めた。父の話によると、革命委員会は今うすでに成立し、情勢はきわめてよいという。もしお前がずっと帰ってこなかつたら、ますます悪い人物に見られる。当時、各級の革命委員会は、ほとんど私の生命の安全を保障して、私に村に帰ることを許してくれたともいう。

後日になって、わかつたことだが、村の一部の人間は、私が帰ってくる情報をかぎつけ、早くから村のはずれで隠れて、私をやっつけようと準備していたらしい。もちろんその後で、また私の家族をやっつけるつもりだつた。しかし、あいにく私は、ある親戚の家で一晩泊まったので、彼らはいくら待っても私を発見することができなかった。私は、家に帰って、二日間後、まわりの雰囲気改めおかしと思つた。彼らはいたるところで、「右派分子」糾弾の世論をおおりに立てていた。私は、危険を感じて夜中に村から逃げ出し、来賓県まで行つたところ、ここにも逃げ場がなくて、やむをえず柳州まで逃げた。柳州は当時、まだ大派の攻撃にさらされていなかった。私はやつと平静になって、文革とはどういうことであるかを考えながら、まき拾いの生活をした。私は父親にも手紙を出して、革命委員会に惑わされてはならないこと、どこでも革命委員会が成立したために、かならず人が殺されていること、革命委員会から距離をおかなければならないこと、逃げ出さなければならぬことなどを訴えた。

父親は間もなく捕えられて監禁された。母親が会いに行ったとき、父親は、考えてみると、やっぱり私の言っていること、考えていることがあたっていたと言ったらしい。父親が殴殺されたとき、私はまだ柳州にいた。柳州が攻め落とされた後、私は捕えられて学校まで連れて行かれた。私は反革命の現行犯として学校から除籍され、監獄に入れられ、強制労働をさせられた——。

「しゃべるべきことは、すべてしゃべった」

黄啓周は、そこまで話すと、黙って立ち上がった。私は、急にあの不可解なことを思い出し、私と別れて帰ろうとする彼に真相を聞いた。

それは、二年前のことで、私が武宣で啓文と啓玲二人と話をした後で、「父親の骨は、どこに埋葬しているんですか」と聞いたら、どうしても返事をしてくれなかったことである。兄・啓文の話によると、骨はかめに入れて、ある高い絶壁に置いているという。

黄啓周は、こう答えた。ある日、兄貴が私に懐中電灯を買いに行くように言い、夜に使うからと言った。兄とおじは、夜中に父親の頭蓋骨だけひそかに掘り出した。彼らは父親の肉を食べた後、すぐに埋葬したのだった。

兄とおじは頭蓋骨を背負って家に持って帰った後、おじいさんが父親の骨をかめに入れて、深夜、だれも知らない山の崖の上にひそかに埋葬したのだった。その場所は、私も知らず、知っているのは、ただおじいさんとおじと兄貴だけです。

広西自治区党委員会は、一九八一年六月、ある特別慰問団を組織した、その慰問団長は父親と一緒にゲリラをやった当時の上役である。武宣県に来て、ある連絡者を通して私のおじいさんに会いに来のだが、交通が非常に不便で、車が入って行けず、私たちの家まで出向けない。もし何かあなたたちに困っていることがあれば、遠慮なく私に言ってくれ——ということであった。そのとき、おじいさんは怒ってこう話した。

「あなたたちはゲリラだった当時、交通が不便ということは言ったことがなかった。よく私たちの家に来ていたではないか。今日になって交通不便と言うのはおかしい。あなたはさっさと私の話を責任者に言いなさい。私は何の困難もない。私は何も助けてもらう必要はない。解放前の当時、わが家は党の秘密活動の拠点の一つで、重要な会議についてはすべて私の家で開いていた。黨員はすべて私の家で食事をしたり、泊まっていた」

慰問団団長はその話を聞いてから、すぐ家に来て、おじいさんに会った。司令員と副司令員が現在、私の父親の遺骨はどこに置いてあるかと尋ねた。父親は彼らの昔の部下で、どうしても哀悼の意を表わしたいのだと話した。そのとき、おじいさんは、彼らにさえその場所は教えなかった。おじいさんはこういうことを言った。

「それは決して昔の上役を信用しないわけではなくて、あなたたちが出かけたなら、ほかの人に知られて困るのだ。私の息子は一生涯、共産党とともに歩んできた。もう何も言うことはない。た

だ、私は、わずかのこの頭蓋骨が、ほかの人によって再び壊されないようにしたいのだ」司令員がおじいさんの部屋を見ると、布団も、かやも、あちこち破れているので、とても気の毒に思い、二、三百元を渡して、部屋を修理できるようにと話をした。

後日になって、県の民生局からおじいさんに数百元がとどき、また生活費補助として数年来の慰問金も渡された。

慰問金の基準は、毎月六元というのが一般的である。後になってから、われわれが少ないと抗議すると、だんだん追加されて六元から九元になった。その後、十一・五元となり、現在はやつと二十二・五元になっている。

私は取材記録を取り出して、一遍読みながら、これ以上、追加説明することがあるかどうか確かめた。

慰問団のリーダーは、元桂中支隊司令員の廖連原と副司令員の章志龍である。黄啓周はしばらく考えてから、また次のように補足した。

……私のじいさんは九十いくつかで、毛沢東主席と同じ生年月日の生まれなんです。名前は黄有珉です。

私は彼を廊下まで送った。彼はオートバイのエンジンをかけ、私と握手をして最後の別れをした。彼は一瞬、後悔するような表情をして「話してもどうにもならない」とつぶやきながら疾

走していった。深夜、静まりかえった街路上に、オートバイのエンジンの響きと私だけが残った。私は心の中でささやいていた。

「かならずためになる。ある日、かならず、かならず」

私は妻とともに互いに誓い合った。時間があれば、もう一度、広西省に来て、若いころから革命を支持し、息子を革命に捧げて、老後が寂しくなった黄有珉老人に会いに来なければならぬ。いや、訪ねて来ると、互いに誓い合った。

人間を殴殺し、人肉を食べて幹部となった紅衛兵

私は、ここでつけ加えて説明しなければならぬと思う。共産党の歴史的スキャンダルを処理する原則はこうである。過去の歴史にこだわってはならない。すべて前向きに見なければならぬ。というものである。たとえば、最初に黄副校長を棍棒で殴り倒した紅衛兵・覃廷多は、人間を殴殺し、人肉を食べる立場を堅持することによって、幹部に抜擢され、逮捕されたときにはすでに科長になっていた。彼女は十年の判決を言い渡された。つぎに批判糾弾集会を主催した革命委員会謝東経副主任は裁判で有罪判決となったが、刑事処分からはまぬがれた。さらに最初に肉を切った女子学生の張継峯（もとの名前・覃柳芳）は、学校教師の職務から解任され、除籍され、田舎に帰って、労働に従事している。

事件処理はこれだけなのだ。この大惨劇を計画し、実行に移したほかの人間は、不起訴になったので、ゆっくりと忘れ去られていったのだ。

武宣大惨劇の取材活動がだんだんと終わりに近づくにつれて、周囲の雰囲気は、少しずつ緊張してミステリアスにもなってきた。

私は友人の強い警告を受けて、夜は絶対、外に出なかった。政府関係の宿泊所105号室に閉じこもっていた。取材活動に外出するまえにも、かならず行き先と通り道と時間を通知した。取材日記については、なおさらしっかり持って、わが身からひとときも離れたことはなかった。食事するとき、トイレに行くときも、しっかりと抱きかかえていた。盗まれることを恐れるだけではなく、奪われることも恐れていたからだ。町を歩いているときも、まわりを見ながら、絶対に入込みには行かなかった。当然のことながら、食事のときもきわめて警戒していた。

レストランの従業員は私の取材目的を知って、笑顔で魚の肉を私の皿にとってくれた。私は毒を盛られることを警戒をしながら、だれかが、おかずを私の皿にとってくれるとき、よく断わって、いい顔はしなかった。私は特別の献立でないものを選んで食事をした。

私はだんだんと武宣県の生活になれてきた。私が知らなくても、私を知っている人がだんだん多くなってきた。やわらかな視線で私を理解していて、ほほ笑む人もあり、また私に警戒心を持っていて、ゆっくりと冷たい視線をおくる人々もいた。

このような状況は、あたかも魯迅が『狂人日記』で書いていたこととそっくりだ。

……早朝、心細くなり外に出た。趙貴翁ちやうきおんの目つきがおかしい。私を怖がっているようで、私に危害を加えるような気もする。まわりには七、八人の人々が顔を寄せて、何か論議しているようで、私に見られるのを避けているようだ。道行く人がすべてこういう様子で、そのうちもつとも凶暴な面相を持つ人が口を開き、私にこつと笑った様子で、私は頭上から足までひやっとしていた。彼らはすでに何か準備していて、もうそれは終わっているような感じだ。

魯迅の『狂人日記』は、そういうふうを書いてあった。これはひよっとしたら、一種の錯覚かもしれない。一方で、錯覚ではないのかもしれない。魯迅の小説の主人公は精神分裂症の患者で、私は正常な人間だ。『狂人日記』は文学的フィクション、文学的虚構きやくであるが、武宣県は全く血塗られた現実である。

振り返ってみると、私はいったい、この土地で何を見たのだろうか。人類文明史上、人間が人間を食うという狂乱状況は、もつとも醜悪なものだろう。このような狂乱の嵐は、決して人間性の弱点からくるものではなく、それは直接的にマルクス・レーニン主義、毛沢東の階級闘争思想からくるものである。

プロレタリア独裁理論で武装され、国家各レベルの党、政策、そして権力機構の黙認のもとで、直接的に計画された組織的な暴行事件である。

食人事件の三段階

武宣県ほか各地の取材活動から、私は広西文革の食人事件について書いてきたが、その精神的側面を分析すると、だいたい、食人事件の展開状況は次の三段階に分けることができる。

第一段階。その特色は、ひそかな陰気と恐怖に包まれた段階である。上林県の数例は典型的である。人々が夜更けに静かになったとき、下手人たちは殺人現場にひそかに来て、腹を切り開き、心臓と肝臓を切り取って、恐怖のなかで慌てふためくのである。そのうえ、まだ経験がなかったので、切り取って持って帰った肝臓は、誤って肺臓であったり他の臓器であったりする。そこで、もう一回、戦々恐々としながら現場にもどり、もう一度、切り取りに来る。煮てから食うときも、数人を呼び集めてひそかにかまどの回りで残り火の光のもとで食べる。だれも会話をしない。翌朝、同志を呼び集めてほかの人々が食わないことを恐れて、牛の肝とか、牛の心臓とか偽って残り物を食べるように勧めた。食べ終わってから、やっと意気揚々として、食べたものは、だれそのれの人肉とか、肝とかであると言いつらすのである。

第二段階は、高潮期。騒々しく、賑やかな殺人現場で行なわれる。このとき、心臓と肝臓を取り出す技術は、もう相当な経験を積み重ねてきていて、そのうえ、かつて人肉を食べたことのあつた古いゲリラ隊員からの伝授もあり、完璧になった。例えば、生きている人間の胸を切り裂くときは、まず肋骨の下に鋭い刃を入れ、「人」字型のように切り裂き、力強く足を踏めば、肝臓と

心臓がたちまち飛び出してくることを知っていた。もし被害者が木の上に縛られているなら、ひざで腹を押せば、すぐ心臓と肝臓が飛び出てくることも知っていた。指導者は最初に心臓、肝臓、性器を切り取っていく権利を持ち、残りを周囲の人間が自由に切り取っていくことがならわしである。紅旗がはたためいて、スローガンが響き渡っている糾弾大会の食人現場は、じつにきわめて盛大にして壮観である。《人肉宴会》は、村々によってそれぞれ特色を持っていた。

私の最初の驚愕と怒りの感情が、多くの醜悪行為によって麻痺すると、私は急に興味ある心理的現象を発見した。それは、「階級の恨み」とか、「揺るがない立場」、「はっきりした立場」などなど、集団的狂乱状態、人間の集団的心理が人間の共食いをもたらしたという問題である。しかし、良心的苛責から、心理的抵抗が生まれたとき、まさにそのときは妥協的な方法としては、敵を食いつくす行為に参加しても、なるべくその人間は食わないようにした。そこで、人肉と豚肉とを一緒に煮込んで、やたらにその中の一塊りをつまみ取って、この心理的矛盾を克服するか、集団的暴行をおおい隠したりしてごまかしたりしている。

もちろん、こういう心理的状况は後世の人間の発明ではないだろう。すでに土地改革の時期にも、各地方でよくそのようなことが見られた。一人一人が意思を持って階級の敵を殴り殺し、一人一人が棍棒を持って、階級の敵を殴り殺し、一人一人が刀で敵を一刺しで殺すなどなど、階級闘争があつた。多くの死刑執行者が処刑隊をつくって、一人ずつ階級の敵を銃殺するという集団

リンチ、集団殺人も行なわれた。この殺人者の心理と集団食人者の心理とは、決して異なることではないのだ。ただ、集団的食人者の心理は、この矛盾を最高潮に高めているので、劇的な場面を生み出したのではないかと思う。

第三段階の狂乱段階はまとめて言えば、食人大衆運動である。例えば、武宣県では大疫病が流行するさいに、屍に群がってむさばり食う野犬の群れのように、人々は狂ったように打倒された敵を食いつくしている。人間を連れ出して糾弾闘争を行なう。闘争があるたびに、かならず死者が出てくる。死者が出れば、かならず食われる。人間がいったん倒れると、気を失っているかどうかにかかわらず、どっと人々が群がってきて、用意していた包丁やあいくちで人肉を切り取っていく。人肉がすっかり切り取られたあとは、はらわたも切り取っていく。骨まで持っていくこともある。

ある老婆は人間の目玉を食べると、目がよくなるというので、彼女は一日中あちこちを歩き回り、糾弾集会を見ると、すぐ人群れの中に入り、待っていた。被害者が地面に倒れると、彼女はすぐ竹かごの中から鋭いナイフを持ち出し、目玉だけをえぐり取ってすぐ逃げ去って行った。数人の年寄りには人の脳みそを専門に食う。頭蓋骨をたたき割るのは非常に難しい。だから彼らの経験は、人それぞれ、細い鉄の管を用意して、その管の先を鋭く磨き、人々が肉を切りつくしてから去っていく間にゆっくりと、だれも奪っていない脳を目がけて、頭蓋骨の上からくぎを差し込むように打ち込み、地面に伏せて鉄鋼の管から脳みそを吸い取ったのだった。やしの実やヨーグルトを吸うような格好である。ある婦人は子どもを背負って来て、また、ある小さい子どもは親孝行のために人肉を家まで持って帰っていったのである。

大衆はそういうふうに入肉を切っていくだけではなく、天真爛漫な子どもたちも、人間を教育すべき学校教師も例外ではなく、その狂乱の人食い事件の嵐の中に飛び込んで、あの残虐な、人間性のない人食い運動に参加したのである。食人事件の嵐は疫病のように熱狂的に大地を席卷した。そのピークときには決して大げさではなく、まさしく《人肉宴会》であり、人肉の宴であった。

まず批判闘争宣言があり、糾弾集会を行ない、その後、人間を殺して、生きているままに人肉を削ぎ、生きている人間が絶命すると、人間の心臓、肝臓、胆臓、胆嚢、腎臓、胸肉、骨髄、太もも、足、筋、……人間の骨肉を切り取り、削ぎ取って、それを煮たり、焼いたり、揚げたり、炒めたり、そして酒にゆっくりと漬けたりして、さまざまな調理方法で、豊かな献立にしたのである。その《人肉宴会》会場は学校の構内で、県病院の中で、人民公社の大隊、県の各レベル政府建物の食堂の中など、いたるところで湯気が立ったのだ。

また《人肉宴会》では酒を飲み、杯を交わし、論功行賞をした。これはまさに恐ろしい地獄絵ではないか。あらゆる宗教の経典に描かれた地獄絵のなかにも、これほど狂乱の恐怖の光景を見

たことはなかったのではないか。

しかし、プロレタリア独裁の暴虐さと残虐さは、人類の想像力の数十倍や数百倍をも超える。中世の恐ろしい宗教裁判でもっとも人を驚かせる刑罰は、火あぶりの刑であって、異端者を生きているまま焼き殺すだけのことだ。人々を集めて被害者の人肉を食べる《人肉宴会》が開かれたことは絶対になかった。

だから、魯迅は非常にいいことを言った。暴君の統治下の暴民は、暴君よりもさらに凶暴である——と。

狂乱の嵐にたった一人で立ち向かった男

しかし、このような人間地獄があっても、決して中華民族の偉大さを失ってはいなかった。というのは、この偉大さは、多くの人間が豊かな想像力と独創精神に基づいて食人の狂乱な嵐を引きおこしたが、しかしまた多くの人間は、その狂乱な嵐に巻き込まれてはいなかった。さらにみずからの生死を顧みずに立ち上がって反抗する人間もいたからだ。

この人物の名前は王祖鑿である。この古い革命家は、ちょうどそのとき武宣県に下放されていた。彼は県文化館の館長を務めていた人である。当時、彼は労働改造農場の家から文化館に通勤していた。毎日、出勤はかならず百貨店前、県病院前の広場を通らなければならない。ある日、

あの光景が彼の視線を引きつけ、びっくり仰天した。血みどろな肉もない、内臓もない、屍の上
に完全な頭が残っている。ハエが飛び交い、内臓がえぐり取られた空っぽの屍しかばねからは、うじむ
しがひどくわいている。

彼は妻を説得して、友人の忠告をも顧みずに、中国共産党中央に極秘で続けて五通の緊急告発
状を送りつけた。

七月初旬のある日、十数日か、二十数日後になってから、武宣県は食人の嵐が熱狂的に吹き乱
れて緊張した空気に包まれていた。突然、重要人物が視察に来るといふ噂が至るところで広がっ
ていた。やがて、長い車の隊列が黔江の波止場に姿を現わした。軍隊は迅速にして川ほとりの
高地を占拠し、首長が川を渡るのを援護した。一隻の渡し船は三十台ほどの車を乗せ、ゆっくり
と黔江を渡ってきた。車の隊列が市内中央部に進入してきた。

広西軍区・欧致富司令員（中国共産党中央委員）が市の繁華街に入ってくると、血だらけで骨
しか残らなかつた屍を目撃した。血なまぐさい匂いが漂い、ハエが飛び交っている。

彼は厳しい声で問い詰めた。

「いったい、何人を食べたのか。もうすでにある人が党中央までこのことを告発している。なぜ
そのようなことを止めなかつたのか。報告もしなかつたのか。なぜ干渉もしなかつたのか」

彼は、県革命委員会・文龍俊主任（武装部部长）の鼻を指で指して、さらにテーブルをたたいた

て大声でののしった。

「文龍俊同志、あしたからもう一人でも食われたら、君の命をもらうぞ。私は君の頭をたたき割るぞ——」

欧致富司令員が激怒したのは理解できる。彼は混乱状態を抑える人民解放軍責任者として中央から送られた人物である。王祖鑒の緊急告発状は中央に届き、共産党指導部を震撼させたのだ。毛沢東たちの独裁的統治は、武力の脅かしをしようとしても、街頭に恐怖の雰囲気をつくり出すことをしようとしても、人食いの嵐は必要としなかったからだ。ある情報によると、周恩来首相は大いに怒って、会議中、広西軍当局の指導者に全員起立を命令したそうだ。

かくて、情勢はたちまちおさまることになった。しかし、武宣県の食人事件の最大の犯罪者の文龍俊も決して首を切られる危険性はなかった。ただ、武宣県当局者は激怒して、早くも党中央に告発した黒幕は王祖鑒という人間であることを調べ出したが、全県の大きな集会でも小さな集会でも、猛烈に全県最大の黒幕を批判闘争した後、《人肉宴会》や食人事件は死者の遺骸とともに、永遠に消え去っていったのである。

私の耳のそばで執拗に告発をささやく声

人々は、広西武宣県の残酷な食人事件を信じるであろうか。私が事件資料からすべてのことを書き写したとき、私が耳を傾けて被害者の遺族が涙で訴えているとき、目撃者が憤慨して、あるいはおののきながら私にその一切のことを告白したとき、殺し屋たちが正々堂々と、あるいは頭を垂れ、私にその罪を認めているとき、当局者の事件処理役人が嘆いたり、私にこの一切のことを説明したとき、あるいは私が今日、文字でこの一切のことを書きつづっているとき、ある声が私の耳のそばで執拗にささやいているような気がする。

人々はそのことを信じるであろうか。歴史のことを信じるであろうか。武宣県文革処理委員会の陳紹権秘書長は、かつて私にこういふことを言った。

「目撃しなかった人は、ほとんどそのことを信じなかった。われわれの文革処理事務者でさえ、最初は懐疑的な態度でこの残酷事件に臨んだ。しかし、後から調べるにつれて、大量の証人と物的証拠が出てきた。われわれはやっと信じるようになった。最初、そのことは文革に対する不満から出てきた噂ではないかと疑ったが、それは事実であったのだ」

もし武宣県の間人でさえそのことを信じなかったら、世界の人々がそれを信じるはずはない。人類もそれを信じるであろうか。いや、信じない。絶対、信じるはずはない。

アダムとイブ以来、人類の歴史があつて以来、ずっと、宇宙時代の二十世紀にいたるまで、人類の文明史上、かつてこのような群衆の狂乱なる《食人宴会》はあつたであろうか。毛沢東の武宣大残酷に比べると、ヒットラーのユダヤ人虐殺、スターリンの収容所列島もどろということは

ていたのだが、私はやつのことで、前公安局局長、現公安局党委書記、杜天生のところから、一部の食人事件被害者名簿を写してきたのだ。残念なのは、この名簿は大いに縮められたものであるという点だ。つまり、共産党の文革収拾政策はきわめて寛大なもので、犯罪行為を承認した人々は次々と否認に転じた。そのうえ、多くの食人事件は、確実な証拠を上げることができなかったとし、例えば、深夜に肉を切り取りに行つて、その後、死体を川に捨ててしまったとか、また食人事件を画策した人々が現在なお、何ら問われることなく居座っている。さらにいろんな方法を使って食人事件の調査を妨害しているので、どの調査も、あえてこれが絶対に正確な名簿とは言えなかった。ただ、これはみんなが知っている一枚の食人事件被害者名簿で、いくら否定しても否定しえない受難者たちである。

武宣県では、いったいどのくらいの人間が食われたのであろうか。このことに関しても、政府関係と民間関係者の間では、証言はまったく不一致である。噂も、伝聞も、いろいろである。王祖鑿の見方によると、百余人という。彼はまたそのためにいろいろ迷惑をこうむることになった。中国では、一党独裁ゆえに、最高当局が武宣食人事件について調べたとしても、大して力を入れることはない。もっとも韋国清を肅清するとき、文革収拾のための査察運動の後、すぐに始まった。しかし徹底的に調べても何のためにもならない。その独裁専制の犯罪行為の記録に、もう一度、血だらけの事実を加えるだけなのだ。だから武宣食人事件の受難者数については、永遠に

ない。

ドイツのファシズムはあのガス室の死体焼却のため、人類が厳しいニュールンベルク裁判を行なった。西ドイツでは、約八、九万人が法廷に起訴され、あの殺人者たちはどこまで逃げてても全世界の法律の網の目をくぐることはできなかった。

スターリンの大虐殺についても、ソ連共産党の首領フルシチョフが、あの第二十回共産党全国大会で世界を驚かせる報告をした。ソ連の作家たちは、大虐殺と収容所列島のファシズムと暴力を競つて告発し、そのなかでもっとも勇敢な人類の紳士、ソルジェニーツインは百五十万文字の『収容所群島』を書き、スターリンの弁解できない罪悪を証言した。

ヒットラーとスターリンの犯罪行為についてのこのような暴露と裁判を前にすると、この食人大残虐事件は全く奇談にしか思えるかもしれない。しかし、中国は今日、何をなすべきか。暴露情けのない暴露をすべきである。もし第一部の起訴状が提出されれば、その後、一千万の起訴状も提出されてくるはずだ。私は絶対、信じる。近い将来のある日、全人類がこのファシズム的犯罪行為を告発するに違いない。共産党という一党専制独裁政権のもとで、われわれは広西事件のニュールンベルク裁判を行なうことができなくても、ある日、人民はかならず、このような犯罪行為に対するニュールンベルク裁判で道徳的清算を行なうに違いない。

犯罪証拠という点では、わが意を強くした。私はもっとも多くの証拠を探し出そうと思つ

歴史の謎となるに違いない。

ここまで書いてきて、私はもう一度、読者の方々に責任をもってはっきりと言明をしなければならぬ。食人事件は決して武宣一県だけのことではない。食人の気風は広西全域に広がっていた。半狂乱的な食人の嵐も武宣一県にとどまらなかった。私は各級の政府関係及び各地方幹部、民衆から、食人が流行した県の名前を一つ一つ確実に確認している。私は全面的に調査することが不可能である。きわめて残念であるが、たまたま私の手元には、政府関係の事件に関する資料がある。

でもこのような事件の資料は、典型的な材料の一部にすぎない。全面的な調査ではないので、統計も不完全で、あくまでも典型的な事例にすぎない。

私の手元の資料だけでも、食人事件は靈山県の二つの人民公社で二十二例、合浦県のある公社の十八例、浦北県のある人民公社の十九例、欽州県の三例がある。

いずれにせよ、食人事件は広西省全域に広がっていたことを証明できる。

しかし、なぜ武宣食人事件の汚名だけが全国的に広がったのか。それは、武宣県にはたった一人の死を恐れない王祖鑒の存在があったからである。彼はこの醜悪事件を党中央に告発した。どの地方の人々も、あえて立ち上がって暗黒に挑戦しなければ、そのところの罪悪は、かならず永久的に暗黒の隠れみので覆い隠されてしまいうに違いない。

徹底的に古い罪悪を清算しないかぎり、新しい罪悪はかならず生まれてくる。しかし、共産党政権のもとで徹底的に清算することは不可能である。すべての独裁政権は、やり過ぎた幹部に対して警戒はするが、しかし、決して法律的に厳罰にすることはしない。それは、独裁政治を維持するためには、ある程度の暴力と恐怖が必要だからである。どの暴君も、どの独裁者も、みずから恐怖の剣を壊すことはないからだ。

文革期間に、武宣県で殺され、迫害によって死んだ人間は五百二十四人。そのうち、食われた者は百数十人。最終的に裁判で有罪判決となった者は三十四人。刑期がもっとも長かったのは四年、最短二年。一般的には七年〜十年の刑であった。

ただ民衆の不満を和らげることができなかったのは、たった一人の死刑者も出なかったことだし、あるいは無期懲役さえ一人も出なかったことだ。簡単に計算すると、一人の人間を殺しても刑期はたった半年だけにすぎないことになる。三十四人の累計刑期は二百余年。もし、西側国家の法律の一部に従えば、いろいろな罪が関連する場合は、一人の刑期だけでもこのくらいの数字に達する場合もある。しかも、それは人類史上前例のない暴力行為に対する最終的な法的制裁ということである。

さらに人肉を食べた人間は、ただの一人さえも法的制裁を受けたことがなかった。私は武宣県の文革収拾事務所の四百余人の食人者の名簿を握っている。もちろんそれはたったの、あのみん

なが知っている大残虐事件の参加者だけにすぎない。いったい、武宣県でどのくらいの人間が食人事件に参加したのか。それは永遠に解明できない歴史の謎である。

私は大まかにそういう数字推定をすることができる。例えば、十八人の死者はすべて食いつくされた。平均にして一人が五十斤の肉を捧げたとすれば、人肉を食べた者が一人半斤を食べたとすれば、それは二千八分ということになる。もし、腹いっぱいではなくて味見の程度で計算していけば、約五千人が人肉を食べたことになる。それ以外に、六十人の死者の人肉が、完全に切りつくされなくても、約五千人ぐらいの人々が階級の敵を食べることができると推定される。

このような計算でいけば、県全域での食人者は一万人以上にのぼるはずだ。もし、政府側の認定した七十六名のネームリストで計算した結果であれば、もし、王祖鑿の推定数字である百余人がだいたい間違いないとすれば、それでは、武宣県の食人者は推定一万二千人にのぼる。だから私が、武宣食人事件を「万人の食人運動」と称したのである。それはいちばん最低限の推計である。読者はおそらく納得してくれるだろう。

ここでもう一回、訂正しなければならぬのは、食人者名簿の四百余人というのは、従来、事件にかかわって人に知られる数であったことだ。事件の調査の順序から、整理したもの、まだ確認できない者も含まれている。多くの場合、群衆が多く、いっせいに群がっていくので、くわしく調査することは非常に難しい。

四百人の名簿のなかで、人間を食べた幹部と党員は約百余人である。党の規律を執行する規律委員会の処分は、いったいどのくらいだったか。ちょうど百三十人である。武宣県で人肉を食べた党規律委員会から処分された人物は、つぎの百三十人である。

人肉を食べた党から除名処分、あるいは党から追い出された者が二十七人。非党員の幹部で、人肉を食べた行政処分、懲戒処分を受け、あるいは除籍された者が十八人。党員労働者で、人肉を食べた除名され、あるいは除名猶予の者は全部で五人。非党員の労働者の中で、人肉を食べた行政処分の懲戒を受け、減俸され、あるいは除籍されたり、除籍猶予の者を合わせると二十一人。農民党員のなかで、人肉を食べた党から除籍処分、あるいは追い出された者は全部で五十九人。また、武宣県で食人者のなかで起訴された者は十五人――。

こういうことも言えるのではないか。約一人の哀れな者を食べると、一人の食人者が処分される。あるいは党から除名され、あるいは行政的に懲戒、あるいは懲戒免職、あるいは減俸。もつとも重いのは、せいぜい除名猶予に過ぎない。このような象徴的な、形式的な処罰は、遺族が納得できないだけでなく、局外者でさえも不平不満と怒りを抑えることはできない。

人肉を食べた人間は、なぜ党幹部であってはならないか？

何人かの文革收拾工作の同志の話によると、中国共産党中央は、広西事件について厳しく処罰

するように指示した。鄧小平は、「広西省で人肉を食べた悪い人間は全部、党から除名処分すべきだ」と署名した。党中央は、広西省党整頓連絡組・劉田夫責任者に、文革収拾工作の開始後、かつてこういうふうに表示した。「他人から、共産党は殺人の党、食人の党ということを書いたためにも、厳罰に処しなければならぬ」。党中央は広西省の食人事件に対してかなり怒ったが、しかし、その処分内容は相変わらず党からの除籍処分だけだった。すべて食人者との関係を断ち切るために、うやむやに血だらけの手をきれいに洗っただけに過ぎない。

広西人から見れば、元凶が厳しく裁判を受けないから、正義は水の泡になった。そのため、やむを得ずつぎの処分方法を提案した。すべての食人者は、続けて幹部になることはできないというものだった。この提案は、実質的には自分を守るためだけの要求に過ぎない。しかし、それでさえ、広西の各級の権力者は絶対、一步も譲らなかつたのだ。

伝えによると、広西省党委員会書記であり、広西事件の最大の元凶である韋国清は、後日、人民解放軍総政治部主任に栄転した。韋国清はかつて、やくざっぽい口ぶりで反論した。

「なぜ、人間を食べた人間は、続けて幹部であることはできないのか」

一方、武宣県で行なわれた党代表大会の席上で、軍官出身の課長、局長クラスの党代表八名から成るグループが名を連ねて、県委員会候補者名簿の中に、人肉を食べたことのある人物が三人いるが、続けて県委員会委員候補に立てることに反対した。すると柳州地方委員会が派遣した

姜肇初副書記は、韋国清と同じような口ぶりで、「党中央からは、人肉を食べた幹部に対して、再び県委員会委員を務めることを許さない、という文献はないではないか」と反論した。この八名は即座に、この三名の食人者が委員に立候補したことに対して、選挙用紙を返上し、神聖な赤い横幕をおろして、憤然と退場した。

共産党政権の幹部たちは、彼らの罪悪行為を覆い隠すためには、死ぬまで権力の座にしがみつこうとしたのだ。ここにいたってやっと、彼らが、なぜ私に文革当時の資料の閲覧を拒否したのかがわかつた。事件資料は、彼らの犯した大きな罪の証拠であつたのだ。とくに、文革収拾に関する資料は、すべてのページが共産党の血によって染められていたのだ。

武宣県にいる間、私が感じたのは、被害者たちの遺族がこれらの資料に対してきわめて関心が深いのだが、殺人者たちも殺人者のボスたちも、この資料に対してとても恐かつたのだ。資料が一日でも存在するかぎり、ある日、彼らの邪悪な行為はかならず厳罰されるに違ひなかつたからだ。

だから、文革収拾の同志たちは、資料が盗まれ、焼き捨てられることを心配していた。

しかし、私が武宣地方で取材した後、北京に帰って、元広西中央工作组汪浩副組長を訪ね、彼に対して私の心配を告げたところ、汪浩の返事は人を驚かせ、私をびっくりさせた。

私も、人肉を食べた青年も同じ世代だ

……八三年一月、われわれ中央工作組が広西省に調査に行ったとき、広西文革に関する資料は全部、失われたことを発見した。資料番号を見ると、欠けているのは、あの数年間の資料である。工作組がちょうど北海市（ほっかい）に着いたとき、資料が焼却される場所だった。彼らは一歩、遅かった。だから、彼らはその場で逮捕された。

後日、わかったことは、広西省党委員会が命令を下して、すべての資料を焼却したのだった。だから、文革関係資料も完全に焼却される可能性がある。そう見ると、広西省は資料を焼却した前科がある。それなら、最高当局の黙認のもとで、あるいは指令のもとで、彼らは再びきっぱりと資料を焼却する可能性もある。

しかし、すべての文革関係資料を焼却することは難しい。そこで彼らがよく使う手は、長期封印という手法である。しかし、長期封印といっても、関係者がすべて亡くなったあと、次の世代がこの食人事件という犯罪行為に対して義憤を起さなくなるとき、やっと警戒を緩めるといふこともある。そこで、私は、私の手中に握っている資料を重視し、生命を賭けて、この貴重な資料を守らなければならない。

「天安門大虐殺」事件後、私が最初にやらなければならないことは、この資料を別のところへ移すことである。私はもつとも信頼できる友人に対してこう頼んだ。これらの資料は私の命よりも大事である。もし私の逃亡生活の困難さにもかかわらず、執筆できる環境を得たら、私はこの資料を運んでくれる友人に対して、これらの資料は私の命よりも大切であり、あなたも命を張って保護しなければならないと頼んだ。

私はこれらの友人の勇氣と知恵に対して、このような資料を保存し、無傷に保護してくれた友人に対して、感謝しなければならない。広西事件の受難者の数十万の遺族も、彼らの勇氣に対して感謝するはずであると確信する。

もちろん、かりに当局が私の手元の資料を焼却し、私のこの本を抹殺しようとしても、十万人の死者と一千万人の遺族を押しつぶすことはできない。彼らは決して、永遠に沈黙を守ることはない。数百万人の目撃者のなかで、良心を完全に失うことは不可能である。ある時期が来ると、彼らはかならず胸を張って告発しようとするに違いない。このような大虐殺事件を地球上から永遠に消滅することは、いかなる残酷で独裁的な政府の厳しい統制でも、ほとんどなし遂げることができない。

文革の高潮期には、私の心にも熱烈な革命的感情がわき立った。私はかつて、銃剣を持ち出し、あるいは、だれのほったまも殴ったことがなかったとしても、それは、おそらく運命が私にくれたチャンスであったのだろう。階級の敵を消滅するためには、私も一切の道徳的障害を克服して、手段を選ばず、敵を消滅したに違いない。ある幼稚な政治的信仰のために暴力を崇拜することを、

私は青年ファシズムの熱狂と称した。

武宣県では、私はつねに自分に対して自分を問い続けた。もし私が当時も同じく武宣県にいたら、私も食人事件に、人食いに参加したであろうか。いや、絶対そんなことはありえない。私は、当時の熱狂的な場面を頭の中に、つきからつきへと浮かべながら、とくに、私が学校内でゆつくりと歩き回っているとき、人肉を食べた青年たちはちょうど私と同じ世代であることを考えてみた。そのとき、私の心身はだんだん揺れ動いた。

あの地面に一列にひざまずいている走資派たちを見ろ。われわれプロレタリア、われわれ人民の敵ではないか。彼らの頭が割れ、血が流れる。哀れむのか。かわいそうだと考えるのか。害のない人間たちだと見るのか。もし彼らがいったんうまくいけば、われわれ革命人民は数百、数千万人が殺されるかもしれない。どうだ、それでもお前はまだ彼らをやっつけないのか。彼らを食べさせてしまわないのか。

いや、私は、それでも手を下せない。私は、あなたの見方には賛成するが、しかし、私はできない。どうして、人間を食べられようか。

それなら、お前は彼らのひとときの肉を切るぐらいの勇氣はあるはずだ。うーん、そうか、お前と彼らは、直接的闘争とか恨みとかの関係がなかった。それでも、よし、われわれの覚悟は上下があり、革命意識も先とあとがある。しかし、もっとも勇敢に、革命派の姿勢を鮮明にして、

彼らに対してプロレタリア独裁を断行しなければならない。人肉はもう煮えた。料理はつくった。お前のクラスメートたちも、お前の戦闘組の戦友たちも、疑いなく階級の敵に対して深い恨みを持ち、すべての仲間はずでに人肉を食べた。

いや、それなら私もひとときをくれ……。

私はこのように考えながら、誠実に自省し、反省しつつ、自分だけを欺くことはできないと思つた。こう見てくると、私は完全に人間を食うことができるだけでなく、心の中でさえも、資産階級の人間論にもとづいて深く自責し、みずから慚愧しながら後悔している。

革命的人道主義の欺瞞——人間の良心を悪魔に渡す思想の悲劇

共産党の数十年来の歴史のなかで、かつて人道主義に対する猛烈な攻撃をしなかったことはない。彼らは十分に知っているから、徹底的に人生を抑圧し、人生を、人間性を取り除くことがあつて、初めて残酷な権力闘争のおとなしい道具になり、従順な道具になる人たちを野獣のように彼らの政敵に向かわせることができる。

人間性に反対し、公然と獣性を提唱することは、文明社会としてあまりにも通用しないので、彼らはやむをえず正々堂々と革命を唱え、革命人道主義を唱える。彼らは革命人道主義の旗のもとで、もっとも残酷な手段で階級の敵を虐殺し、敵に対する寛容は革命人民に対する残酷さであ

ると言い、地主、富農、反革命分子、悪い分子、右派分子はすべて、われわれの敵であるとし、彼らはわれわれをひっくり返し、われわれが彼らを倒さなければ、われわれもやられると言う。だから、前国家主席もわれわれの敵である。彼は紅旗を掲げて紅旗に反対するからである。違った政治的立場と違った政治的見方を持つ人は、すべて敵なのである。だから、戦車、機関銃、装甲車で、彼らをひき殺さなければならない。

このような獣性の革命的人道主義の旗のもとで、共産党は、良心と知性を失ってしまった。彼らは、党内の権力闘争の失脚者に対して、それは政治路線の過ちと称した。広西事件も、疑いもなく同じく政治路線の過ちである。私が広西省にいる間、私はある道理を悟った。それは、いわゆる路線の過ちというのはすべて、共産党の犯す反人類の犯罪行为である。

革命的人道主義の欺瞞ぎまんのもとで、われわれは人民を虐殺すると同時に、自分の良心と人間性もすべて悪魔に渡したのだ。われわれは、人性の代価をもって美しい社会と取りかえようとした。われわれは、血だらけの死体を乗り越えれば、やがて人類の歴史上、もつとも美しい明け方が訪れてくると思っていた。しかし結果的には、あの輝かしい夜明けはずっと来なかった。われわれは、逆に人間性を失ってけだものの群れになった。一步一步と、暗黒の地獄に入ってしまったのである。

中国人よ、われわれの手足となる中国人よ、考えてごらんなさい。われわれはみずから問わなければならぬではないか。広西事件はただの広西事件ではなくて、食人者たちは、ただ単に何千人、何万人だけではない。いや、広西省は広西省ではなく、広西省は中国そのものである。食人者は食人者ではなく、食人者というのは、すべてわれわれの民族である。

しかも、われわれは人間を食っただけはなく、われわれはみずから自分も食っている。いわゆる自食である。もちろんそれは、われわれがお互いに殺し合いながら、父母、兄弟、姉妹を食い、さらにわれわれ自身、自分の魂まで食ってしまうのだ。共食いは、一つの民族が生存に頼って、しかも全人類とともに人間の樂園をつくっていかねばならない基本的な素質である人間性を失ってしまうものだ。

広西省から吹く風は、怨靈おんりょうたちの遺恨いこんの声だ

もうそろそろ片づけなければならぬ時期が来た。病状は急に悪化してきて、私はもうそれ以上、取材活動を続けることはできなくなった。しかも、手中に握っていた資料は、私に対してはますます大きな精神的負担になった。

もし、あの罪悪を犯した殺し屋たちがいったん、私が北京の上層部との何の背景も何のコネもなく、たった一人ぼっちであることがわかれば、彼らはかならず私の貴重な資料を奪っていくに違いない。彼らがやれる方法を考えてみると、じつに枚挙にいとまがない。例えば、窃盗、強奪、

火災、自動車事故、あるいは公然と私が秘密を窃盗した罪で逮捕など。

武宣県でもっとやらなければならないことはいっぱい残っているが、しかし万全の策としては、私はすぐ離れなければならない。いったん心の中で決定すると、たちまち私は長距離列車の駅まで走って行って、武宣県に別れを告げた。

しかし、途中、緊張の心はまだ一瞬も緩んではいなかった。途中で上下車の人々が私に近づき、意図があるかどうか、すれ違った車が急に止まって、そこから制服を着た人間が列車に上がってきて、あるいは列車を止めて捜査に来るのではないかと心配していた。列車が疾走していく間、私は窓から外を眺めながら、無数の受難者が微笑しているように見えた。彼らはひよつとしたら、恨みもなく、求めることもなく、ただ期待、期待、無限に私に期待しているに違いない。

しかし、突然、私は急に悪かったと思い直した。武宣県から離れるまえにあまりにも慌てたので、彼らと告別することさえすっかり忘れた。私が被害者が難をこうむったところで、目を閉じて黙禱する時間さえなかった。しかし、彼らは私を許してくれるだろうと思った。彼らは私の気持ちを知っているはずだ。もうそろそろ広西省から離れるときだ。もうそろそろ広西省に別れを告げるときだ。

私はいかに全人類に向かって、広西省のことを説明するか。賓陽、上林、鍾山、蒙山、武宣各県、私が歩き回った広西省の大地の上には、共産党暴虐政権が築き上げた血なまぐさい「紅色記念碑」があちこちに建っている。この大虐殺、共食いを特徴とする広西事件は、人類の暴虐史上、空前絶後の「紅色記念碑」である。それは、十万人の無言の犠牲者の首によって堆積され、筋肉によって詰められ、鮮血で血だらけに塗られた「紅色記念碑」である。

そよ風がヒューヒューと吹く。あれは十万人の怨霊が彼らの遺恨を訴える声に違いない。朝露と夕立ちは、あの百万人の遺族たちの涙に違いない。夜は鉛色のようにだんだんと重くのしかかってくる。それは、二千四百万人の広西省の人民が、靈魂に染み込んできた永遠に失われたい恐怖感に違いない。

広西省の大地はきわめてきれいなところで、あたかも南方の少女のように、朝もやと夕暮れの中でほほ笑んでいる。しかも平和である。私の陳述に対して絶対、過去においては、広西省に行った人々はまず、あの珍奇な、山水画のような桂林の風景を思い出すに違いない。

しかし今後、人々は広西省のことに触れると、かならずもう一つのイメージを浮かべるに違いない。そこにはもう一つの人間の想像をはるかに超える、残酷な不可解な「紅色記念碑」がそびえ立っているからだ。

4章

周恩来首相への「告発状」

●「私は北京の元秘密黨員。一人の共産黨員の使命として…」



「広西大虐殺」事件のあった広西チワン族自治区

「告発状」執筆者——解放前からの元秘密黨員だった

一九八八年の春、私は北明とともに、第二回目の広西省取材へ出かけた。そのとき、私はちょうど彼女と結婚したばかりで、第一回目の広西取材からすでに二年近くたっていた。われわれは省都・南寧市についた。飛行機からおりると、すぐ荷物を持って広西師範学院に直行した。あの武宣事件の英雄、王祖鑿に会いに行ったのである。広西師範学院の裏側のごく普通の住宅の二階で、王祖鑿はきわめて情熱的にわれわれを迎えた。彼は普通の身長で、彼の波瀾万丈の人生の雰囲気は感じられなかったが、非常に上品な、少しふっくらした顔と態度である。初対面とはいえずでに手紙の往復があるので、古い友人と会ったように、話はすぐ本題に入った。

彼は武宣事件について、われわれに多くの資料を提供してくれたわけではなかった。彼に会いに来たのは、この立派な英雄を理解するためだ。われわれは話に入った。一日、二日で話が終わらなかつたら、三日目も話を続けるつもりだった。

王家は広東省羅定^{ちてい}の出身で、王祖鑿は一九二四年十二月十五日、北京で生まれた。小学校のころ、北京と湖北省武漢^{ぶかん}で過ごし、中学のときは広西省梧州にいた。二年後、成績優秀なので、飛び級で、やがて桂林中学（高校）に入った。

父親は王紹輝^{しやうき}。有名な鉄道専門家である。日中戦争の武漢大会戦のとき、王は南寧市からベトナムのハノイまでの鉄道の建設、修理を受け持っていた。ちょうど完成のときに、日本軍はすでに南寧を攻め落とし、父親は部下を率いて橋と要所を爆破し、その後、千余人を率いてハノイまで撤退した。そのため、王祖鑿はついに経済支援がなくなって、原稿を書いて学業を維持するのが精いっぱいであった。

彼はよく八路军の駐桂林事務所に入りにしていた。多くの雑誌と新聞で革命情報を読み、最初、重慶市（四川省）の共産党新聞『新華日報』に投稿した。ある日、「于懷^{うかい}」と署名がある返事をもたらした。投稿した散文の詩は、魯迅の書き方をまねしたところはあるが、もうちよつと革命思想が高ければいいという返事であった。それ以降、彼はよく「于懷」と文通をした。しかし当時の『新華日報』は原稿料が払えないので、その代わりに書籍を原稿料としてもらった。王祖鑿はいつも革命関係の本をもらい、いちばん多いときは『レーニン全集』十三巻をもらった。このようにして、王祖鑿は自然に最初のマルクス・レーニン主義の思想教育を受けた。于懷という人物は喬冠華^{きやうかんか}（周恩来元秘書・元外相）である。

王祖鑿は日中戦争後、少なからずマルクス・レーニン主義を理解していたため、民主青年連盟に加盟した。民主青年連盟は共産党青年団の前身である。やがて王は一九四七年十二月一日、共産党に秘密入党し、その後、彼は西城私立大学に送られ、姜千里^{きやうせんり}（現在の中共中央顧問委員会主任）と一緒に、党支部の地下活動の仕事をした。間もなく、王はまた二つの大学の秘密工作にあたることになった。

一九四九年一月、北京は平和解放された。王はそのとき南方行きを希望して、広東と広西解放工作を志願した。しかし工作は必要だが、彼はあまり体調がよくなく、吐血するので、姜千里らは許さなかった。しかし、王はどうしても南方へ行きたいという意思が強いので、とうとう第四野戦軍南下第一分団第四大隊第十五中隊の保衛幹事として参加した。この部隊はすべて熱血の知識青年によって組織され、約一万余人のうちの大部分が大学生で、集中訓練期間には、周恩来、朱徳、李立三、王明、吳玉章、薄一波、譚政、羅榮桓など、中共高級指導部のほとんどが講座を設けた。新政権樹立をすべて彼ら若い青年に託したのであろう。

広西に入った後、王祖鑿の入っている学生軍は第十三兵団と名前を変えた。ほとんどが大学生によって構成された軍隊となった。当時、党は一方的に軍を進めながら、もう一方では各地方のゲリラとともに新しい政権を樹立し、だんだんと勢力を都市、村へ広げていった。匪賊を征伐し、食糧を徴収し、地主の反対にあいながら、土地改革を行なった。新しい政権樹立の局面は王祖鑿の目の前に現われつつあった。

彼の経歴と才能は指導部からも注目され、指導部は土地改革の後、彼を省の党委員会書記秘書に任命する予定だった。しかし、読書人氣質の彼は、あまり党中央の権力機構に近づきたくなかった。彼はもともとある夢を抱いていたのである。小説を書く夢だ。

彼は少年時代、ふるさとで太平天国軍の首領・凌十八の物語を聞いたことがある。太平天

国の初期、凌十八は一万余人の部隊を率いて、広東と広西を転々として戦った。やがて、孤軍奮闘しながら包囲され、全員飢え死にした。一人も投降しなかった。この悲劇が彼の心の中に深く根をおろしていたので、彼は権力機構に目を向けず、社会の最下層に根をおろすつもりであった。彼は農民生活に詳しいので、将来、農民革命を書きたい気持ちが強かったのである。

一九五四年、王は来賓県の県委員会書記に任命された。彼は華東分局に来たばかりの陶鑄に手紙を書いて、広東に転任してもらおうように頼んだ。その理由はやはり、凌十八の悲劇の小説を書きたいからだだった。陶鑄の返事は、現在の仕事を続け、小説のことについては三、四十歳になってから考えても遅くはないという勧めであった。

やがて、合作社運動、組合運動の嵐が全中国全域にうず巻いた。彼の小説を書く夢もそこで水の泡になった。組合運動は最終的な勝利を得たので、王は仕事を続けた。強制的な食糧の徴収運動は、王にとってきわめてやりづらい仕事だった。彼は農業担当として、合作化（組合化）運動を進めた。彼は人間は食べなければ餓死するということを知っている。だから彼は大量徴収の運動に反対した。しかし、彼の上役、陳東という人は、彼にこう言った。

「君の担当している来賓県はいちばん土地面積が大きい。しかも人口もいちばん多い。この県が食糧を出さなければ、どこから食糧を取ればいいか。君だけは騒がなくてもいい。もし餓死者が出れば、君がまた私と相談しても遅くはない。私はそのとき、君のかわりに牢獄へ行くから。も

し、ほんとうに食糧がなかったら、私はあなたのかわりに調達することを保証する」
王は上役とまわりの強い圧力のもとで、黙って食糧の大量徴収の任務を続けた。

「右派分子」と宣告されて、労働改造農場へ追放

一九五六年の春、餓死者が出たという情報が入ってきた。王はびっくり仰天し、すぐに幹部たちを派遣して、各地の飢饉状況を調べた。来賓県では少なくとも二、三の区から栄養不良による水膨れと死者が出た。三日後、調査統計数字が提出された。餓死者はすでに千人を超えていた。王は南寧と柳州から四百余人の医療関係者を派遣し、救急措置をとった。医療関係者の結論はきわめて簡単明瞭である。水膨れは病気ではなくて、飢餓、食糧不足が原因だった。彼らは木の根を食べていた。飢餓状況は大変に深刻で、さっそく、広西党委員会に報告された。

広西党委員会は緊急措置をとって、ほかの省から食糧を調達した。そのときの共産党は上下各級幹部はまだ非常に良心的で、農民たちの死活の問題については、非常に迅速に緊急措置に動いた。来賓県は緊急命令を下し、すべての幹部はおかゆ以外は食べてはならないことになった。一人一人は毎日四両の食糧を節約して、集中して飢餓の人々を救助した。それ以外に一部の子算を出して、豚肉と卵を買っておかゆに入れ、農民を救済した。十日過ぎてから瀕死の水膨れの者はやっと立ち上がることができるようになった。しかし、いくら緊急措置をとっても来賓県では、

千九百九十七名が餓死した。

このような飢饉は各地で起こり、平洛県は最もひどかった。そのとき、民主派の黄少雄（こうしょうゆう）は北京まで行って、国民党統治時代でさえ、こんな悲劇は起こったことはなかったと訴えた。北京は間もなく銭英（せんえい）中央委員を派遣して、広西省の善後処理を行なった。一部の県委員会書記、県長、地方委員会書記などを配置転換した。銭英が来賓県に来たとき、王は彼に処分要求の報告を出した。銭英は経過報告を聞いた後、王を処分しなかった。

しかし、王の管轄下で二千人もの餓死者が出たという惨状は、彼がいくら忘れようと思っても、なかなか忘れられない。彼はだんだんと自責の念につきまとわれた。革命をやり、社会主義建設をやる以上、農民を飢え死にさせてはならない。その良心のつがめが彼の不安をいっそう深めた。二年後、反右派闘争の嵐が中国の大地を襲った。やがて大きな政治的大迫害がはじまった。王は長い間の良心のつがめと悩みを鳴放大会、大鳴大放大会で述べた。しかし、彼は間違った。彼は党会議の席上で自己批判をした。餓死者が出たのにまだ処分を受けていないと述べた。ここまではまだよかった。自分に責任があるというつがめは、それほど周囲が気にしなかった。しかし、彼は余計なことをしゃべってしまった。彼はその一言で、一生の代価を払わなければならなかった。彼は、党の統一徴収と統一販売の統制政策は決して間違っていないが、農民には一日一斤の穀物が必要である。そうなれば、餓死者が出ないと述べた。このとき、党の幹部たちは彼の

言いたいことをかぎつけていた。

会議後、王は余計なことを言ったことがたつた。農民に一日一斤の食糧を残すと、一年に三百六十斤の食糧が必要である。そうすると、統一徴収の任務を完成できないことになる。幹部たちは、王の考え方が党の統一徴収政策に反対する以外の何物でもないと分析した。翌日、王は会議の参加資格を喪失したのである。やがて、壁新聞は彼を反党、反社会主義と書きたてた。王は壁新聞を読みながら考えた。もし、彼の理想主義的な性格からすれば、かならず反論するに違いない。しかし、彼は沈黙することを選んだ。

彼は少し前にやつと夏衍かえんから頼まれた映画の脚本を完成していた。二年間で八回も脚本を書き直し、農業合作化運動の思想闘争と、社会主義の中国での偉大なる勝利を謳歌した作品だった。周囲の人々は彼になるべく反抗しないように、沈黙を守ったほうがいいと勧め、態度さえよければ、今日までの地位を守るし、脚本が広西の最初の映画製作になることも取り消しとならぬだろう、と述べた。しかし、最終的には、彼は裏切られた。彼は右派分子として党から除名され、武宣の労働改造農場に下放された。彼の念願であった映画の製作も中止となった。彼は役職を絶たれただけでなく、芸術も彼にとつて無縁となった。

彼は凌十八の悲劇を執筆する前に、みずから悲劇を演出した。政治的悲劇は自分個人にとつてどうということはない。ただ、彼はどう考えてもわけがわからなかった。農民を餓死させても無罪で、彼らの命を保つために食糧を守ることが許されないとすることは、いったい何たることだ。なぜ農民を餓死させた責任者が、党を除名されずに、自分はただ一言だけで労働改造農場へ行かなければならないか。どう考えてもわけがわからない。現在、党はわれわれを反面教師にするときだ。われわれは人民のテキストにならないのであろうか。とにかく社会主義のため、共産主義の偉大なる事業のために、自分は十字架を背負わなければならないのか。

妻は、闘争目標が一人足らず、右派分子と批判された

そのうえ、彼は自分の妻、張慰人ちやういじんまでが右派分子として、極右と決めつけられたことがどうしても理解できず、どうしても我慢できなかつた。彼女は解放前からすでに秘密の共産党青年団に参加していた。解放後、柳州地方委員会青年部に配属された。王と結婚した後、農村へ行って党支部を組織した。彼ら二人は新しい社会主義社会の建設を夢見ながら、自転車に乗り、馬に乗り、たまには荷物を背負って農村を歩き、党組織を歩き回った。王が右派分子と決めつけられたときさえ、彼女は地方に行つて、まだ社会主義建設の宣伝を続けていた。彼らはすでに二人の子どもがいる。本来なら、彼女は反右派闘争のころは別に批判闘争されることはなかつた。しかし、当時、彼女の所属単位では右派分子闘争が目標にまだ一人足りず、達成できなかったので、周囲はどう見ても彼女を右派分子として取り上げなければならなかつたのだ。

もう一つは、彼女は自分の夫の王に対して、一枚の壁新聞も書かなかった。当時、彼女は一万余人の労働者を連れて、豊収^{ほうしゅう}ダムを修築していた。そのとき、運動担当のグループは彼女を県委員会に呼び戻し、十四人がつきつぎに尋問し、彼女に夫のことを暴かなければならないと命令した。しかし、彼女はそうしなかった。尋問のとき、彼女はこういうことを言った。

「王は全身全力で党のために、人民のために仕事をした。彼は決して右派分子ではない。彼は一人のよい共産党員である」

夜が明けた。審査の結果、彼女は極右分子と宣告された。彼女は武宣県の労働改造農場に下放された。夫婦二人の農場は十余里しか離れていないが、しかし、約半年間、お互いに相手の生死は知らされなかった。武宣県の農場は女性がイグサを植え、男性は基礎工事を担当し、レンガづくり、あるいは土運びである。彼は重労働を志願したので、レンガづくりに属することになった。

南方は石炭が少ないので、レンガ焼きはほとんど草を使っている。一日二十四時間、昼夜の別なく続けて絶えず草をかまの中に入れ、二、三十日間焼き続ける。その後、かまを密封し、二日間でレンガができる。この仕事は農場でいちばん厳しい重労働である。毎日四食である。しかし、王はあえて彼が犯した人民に対するとがめが終わっていないから、そのような重労働に従事するのだ、と自分を励ましていた。

やがて、大躍進政策が大失敗した。そのため、大飢饉が襲ってきた。食糧の配分も毎日二斤か

ら一斤へ減らされ、間もなく数両まで減らされた。半分が米、半分がヤマイモか、サツマイモである。いくら頑張ろうと思ってみても、食べなければ頑張りがない。朝から晩まで頭の中で考えていることは一つだけ、食べることであった。

妻は夫の身体が水膨れになったと聞いて、毎日、夜中になるとひそかにイモ畑に行って、ヤマイモを掘ってくる。十日か半月ごとに一日の休暇があるので、乾燥したイモを包んで夫の農場へ持っていく。夫がレンガ焼きの仕事をしているので、仕事が終わった後、ほとんど歩けなくなる。一度、入院もした。病室の食事は、おかゆがあるので、彼女は病気見舞いするとき、ひそかに食べ物を持っていく。そのことが、ある右派分子の医者に発見され、農場責任者に告げ口された。農場責任者は、夫婦二人に同情していたので、密告者を叱った。

「あなたは病人を見るだけでよい。ほかのことについて口を出すな」

北京にいる昔の秘密党員である戦友も、父親も、ときどき食糧のクーポン^{ビヤウ}（票）を節約して、彼に送った。一緒に労働改造されている仲間たちは、王はもはや耐えきれなくなっていると思つて、一緒に一匹の犬を買ってきて、その犬を殺して肉を焼いて、一人ずつ、二、三斤の干し肉を分け合った。ベッドの下に隠して、薬を飲むように、毎日数切れずつ食べさせた。

その後、農場の責任者は、王夫妻二人が同じ住居に生活することを許可した。彼らは豚を飼うようになった。

どの労働改造農場の人間でも、最大の理想は、たっぷり豚肉を食べることである。彼らは一生懸命、豚を飼った。仕事後は豚の飼料用の草を刈り、月の光の下で切り刻んだ。豚を殺すことは人生で最大の喜びであった。だから、だれもがだれその豚はいつごろ殺すかを推測したり、だれその豚はあと一カ月待たないと殺せないなどと想像していた。人々は豚を殺す日を祭日と考えていた。だれかの家が豚を殺せば、かならず隣り近所に一斤の豚肉を分け与える。豚肉を食べると、精神が奮って、あたかも地獄から人間の世界に帰ってくるような気がした。

しかし、王はさらに多くのことを考えていた。なぜ社会主義はこういうようになったのか。なぜ労働改造農場行き人間がそれほど増えたのか。党中央の禁止令を犯して牛をつぶして、公社の人間を救った大隊や小隊の幹部たちは続々、党から除名され、労働改造農場に下放された。そのとき、全国の大飢饉情報が続々と入ってきた。飢えて、水膨れして、歩けなくなった人々は、一服するとき、かならず不平不満を互いに言いふらした。ただ、あえて党のことは言えなかった。しかし、王は知っていた。彼らの不平不満はすべて党に向かっていてに違いない。彼はそのような不平不満の大合唱には絶対参加しなかった。このようなことはいったい何のためだ。どの省で何十万人が亡くなったとか、百万人以上に達したとか、農民は毎月三斤、五斤だけの食糧でどうして生きていけるのか。彼は共産党を名指して恨みを言ったり、ののしることはできなかった。共産党は人民を指導して、偉大な社会主義の理想を実現する前衛であり、自分もその一人であると、思っていたからである。彼は困惑して、毎日悩んで眠れなかったし、自分が恥ずかしくて頭を上げることができなかった。

一九五九年の国慶節の直前、同じ労働改造農場の隊員たちは、王に一つのよい情報を知らせた。第一回目の労働解除のメンバーは十八人いる。その中に王も入っている、というのだ。彼の評価はかなりよかったからだ。王はひそかに喜んで、共産党はついに私を許したのだと考えていた。第一回目の右派分子の処罰解除が国慶節のときに出た。しかし、王の名前は入っていなかった。彼はあえて上のほうに聞くこともできなかった。農場の書記は仕事の終わった後、途中で王と会った。みんなの前で車からおりて、王と握手をしながら、「決してがっかりしてはならん。もともと頑張っていかなければならない」と語った。この一言だけで王は温かく感じた。組織はまだまだ私を信用しているらしい。

文化人であり、芸術的素質があるから走資派だ

一九六〇年、労働改造から四年目、王夫妻はついに右派分子の名前が消された。その後、王は武宣県の文化館館長になった。それから名誉回復と党籍回復には、まだ十九年間の長い長い歲月が待っていた。政府役員になって昇進できなくても、王は決して後悔はしない。残念にも思わなかった。しかし、凌十八の悲劇はときどき彼につきまとい、彼の人生の最大の夢とは、いつか、

この小説を完成する宿願だけであった。しかし、彼はなおもまだ理解できなかったのは、彼自身の人生が逆に書くべき悲劇にもなったことである。彼はよくこう自問自答している。「あれは何かの間違いだ。個人の是非は取り上げることではない」彼は文化館の館長の条件を利用して多くの書籍を読み、書く用意をしていた。彼は現実から逃避して歴史の世界に入って、それに専念しようと思った。しかし現実はそのほど容易に避けられるものではない。

間もなく、王の過去の部下であり、現在の県長、黄達が、彼に政治専念の仕事を頼んできた。現在の有利な情勢と階級闘争の文芸のテーマについて、王が宣伝物を書き、それを県長本人が壮族の言葉に翻訳して、壮族の宣伝隊となって地方に行つて演出する計画であった。黄達という人物はこの地方の有名な壮族の民間歌手で、口をあけると、すぐ歌を歌う。だから彼が農村に行つてなぜ社会主義路線をやるのか、政府の政策を宣伝すると、彼の講演はすぐ歌になり、地方の民衆は、彼の歌を聞きに来たのだった。

王は彼をいい相棒と思つて、石祥河の讚歌を書いた。この讚歌というのは、水利工事を修築する人民運動をたたえる大合唱の歌である。この歌は黄河大合唱と似ている。作曲者は環江県の文化館館長。北京中央音楽学院の卒業生で、名前は紀良と言う。彼は卒業してから間もなく、彼の婚約者の良某が病気で亡くなったので、彼は名前を紀良と改名した。それほど純情な人は、世の中ではなかなか見られない。しかし、彼も純潔な人間であるがゆえに、右派分子にならざるを

得なかった。彼は海軍南海艦隊の文化工作団音楽隊指揮者から、環江文化館館長に左遷されたのである。

一九六四年、石祥河讚歌が完成した。黄達県長は大変に喜んで、すぐ二百名の高校生を集めて日夜練習して、数日たつてから水利修築の工事現場へ発表に行った。この歌はあちこちで演奏されたので、遂に石祥河の讚歌は武宣の誇りになった。あの雄大なメロディは武宣の人なら、だれでもその曲を覚えてはいるはずだ。

しかし、その讚歌はやがて災難をもたらした。文革が始まると、黄達は全県最大の走資派と決めつけられた。文化人で芸術的な素質もあるので、走資派以外にもう一つの罪名が加えられた。彼は「呉晗」である。もちろん、そのときの王は「鄧拓」となった。讚歌はそのとき毒草になりかわった。黄達は至るところで見せしめの街頭デモに連れ出され、王はそのときも彼とともに双子のようにあちこち引き回され、批判闘争された。しかし、彼らはとうとう最後まで生きのびた。ただ、あの純真な音楽家の紀良は早くに亡くなった。彼は批判闘争から家に帰ってきてきて二階に上がり、清潔な軍服に着がえ、首を切つて自殺したのである。血は床に流れ、翌日、一階の天井にしみ出してきたので、人々はやつと彼が自殺したことを知った。この芸術家は人間の尊厳と命をかえたのである。紅衛兵たちは粗末な棺おけをつくり、彼の体はすでにかたくなっていたので、四類分子に命令して、石で足の骨をたたき割つて、やつと棺おけにおさめた。

文化大革命は、早くも全面内戦にまで発展した。人々はもはや死んだ虎を批判闘争してもどうにもならないとし、王祖鑿は逆に前よりは自由になった。一九六八年の真夏のころ、武宣県の食人運動は高潮期で、王は毎日、文化館に出勤するとき、民衆が生きている人間を殺す血なまぐさい場面と、血みどろで地面に横たわっている死体を毎日目撃して、もっとうしても我慢できなくなった。遂に、中国共産党中央に告発文書を送ったのだった。

しかし、そのとき彼の友人はびっくりして、王に言った。

「王さん、そのような手紙は書いてはならん。絶対書くな。あなたは、やはり自分を大事にしたほうがいい。仮に告発の手紙を出しても、郵便局は絶対、通さない。あなたは自分の命だけ守れば、それは不幸中の幸いである」

王は友人の目の前でその手紙を破いて、安心させた。しかし、農場に帰ってから眠れなかった。そのことは妻に相談することもできなかった。しかし、彼は書いたほうがいいか、書かないほうがいいか、十分にわかっている。もし書いたら、結果は、彼の人生は非常に悲惨に違いない。殺人者を告発すれば、下手人たちに食われる可能性がある。人食いたちを暴けば、荒れ狂った民衆に食われるかもしれない。あの肉まで切りつくされた骨だけの人間は、彼の目の前にあらわれ、あたかも彼にもっとはつきり見ろ、といっているような気がした。あの狂ったような、生きたまままで胸を切り開く場面、あの被害者の絶叫、群衆の恐ろしい目、彼はあたかも目の前で見ている

ような気がした。

凌十八は、人に食われもしなかった。しかし、彼は生きたまま人に食われるだけですむまい。彼は右派分子である。真つ暗な夜中、彼は妻や子どもの穏やかな呼吸を聞きながら、余計に心を痛めた。だが、彼は我慢ができなくなった。彼が仮に死んでも、それは一人の正直な共産党員の避けられない責任である。死ぬべきときは死ぬ。しかし、彼の精神的な支えとなる妻子はどうなのか。彼らはこのような残酷な場面を果たして忍んでいられるだろうか。彼らは将来お互いに助け合って、長い長い人生を歩いて行かねばならないのだ。

では、もし書かなかつたら、もちろん一家の平安無事を保てる。武宣県が人食いの人間地獄になっても、おそらくだれもあえて彼らの農場に入ってくることはありえない。というのは、当時、武宣の農場の権力を握っているのは一部の復員軍人であったからだ。彼らはわざわざ両派の争いを避けて、どちらの派閥にも偏らないことを明確に打ち出している。どの派閥にも参加しない。しかし、だれかがわれわれの農場を攻撃したら、われわれは必ず反撃する——という考え方だった。しかし、王は将来に対して良心のとがめをもって向かわなければならなかった。二千人を餓死させた、あの悲惨な事件からもうすでに十余年、罪はすべて彼にあるのではない。しかし、それは良心の問題である。彼は暗い夜中、自分の将来の行き先をはつきりと見つめていた。このままでは長い長い余生の中で、彼はただ魂を喪失した、生きている屍になるのではないか。この事

件は果たして暴くほうがよいか、あるいはそのままにしたほうがよいか。

王祖鑒が書いた五通の「告発状」

しかし、彼は考え抜いたすえ、とうとう告発する決心をした。彼は書き始めた。中国共産党中央に告発状を書いたのである。

「私は王祖鑒である。北京の元秘密黨員、現在は右派分子の処分から解除された者で……」

彼は武装闘争から虐殺、そして狂乱した共食いの惨劇を書きつづけた。校長、中学、小学校の教師たちほとんどが人を殺して、人肉を食べた。こういうふうにずっと人肉を食っていくと、いったいどういうような世の中になるのであろうか。武装部も県革命委員会の指導者たちもまわりで眺めているだけで、何も阻止しない。いったい、いつまで食べていくのであろうか。文革と言っても、人を食べてもいいということではない。とくに、革命委員会が成立した後、情勢は全部、党の手の中に抑えられている。銃器類もほとんど掌握している。どうして人を食わなければならないのか。

彼は一つ一つ、被害者例を取り上げて、責任をもって、こう宣言した。食人の嵐はもう武宣県全域に広がっている。中央はすぐにそのような行動を阻止しなければならぬ。

広西全域に広がった食人の嵐は遂に、この名が知られてない一人の人物の告発によって知られ

たのである。

王祖鑒の告発状は、広西独立王国の郵便検閲をくぐり抜けた。合わせて五通の緊急告発の手紙の受取人は、すべて彼の兄弟姉妹と親戚である。彼らは急遽、北京の昔の秘密黨員に手紙を手渡し、手紙は最高当局者の手にまで届いた。周恩来は大いに激怒し、広西軍区司令の欧致富を戒めた。軍区司令員は急に兵隊を引き連れて武宣に赴き、県革命委員会の文龍俊主任を大いに叱って、そこでやつと食人運動は止められたのである。

文龍俊らは大いに怒って、密告した黒幕を探し出すように命令した。一部の疑われた人物はみんな逮捕され、尋問されたが、王の名前だけは出なかった。というのは、彼はその当時、四年間の労働改造生活を送り、小さい文化館の館長にすぎなかったのだ。だれも彼がやったとは考えなかったのだ。残念なのは、彼の友人、邱君呂が疑われ、注意人物の一人となった。彼は王の忠告のもとに、三人の息子と大武装闘争の前夜に非主流派の武闘拠点から、奇跡的に逃げ出していた。人々は邱君呂の後ろにはだれか、彼に教える人がいると思つて、彼を逮捕してリンチし、密告した人物を割り出そうとした。邱君呂はさまざまにリンチを受け、四日目に死ぬ直前について我慢できなくなって、王かもしれないと漏らしたので、闘争はその後から始まった。

王が県文化館で勤務中、民兵数人が押しかけて来た。彼は突然、蹴られ、立ち上がるうとするとき、すでに縄で縛られ連れて行かれた。人々は彼に向かって大いにののしった。

「この野郎、あえてわれわれが人肉を食ったことを暴いたな。もし三カ月前だったら、お前の肝はもうわれわれの腹の中に入っている。お前の百斤前後の肉も、われわれ、貧下中農のお腹に入っている。お前の骨を川に流して、広東のふるさとに送り返すぞ」

民兵の廖伙寿連隊長は、かつて十数人の肝を食べたことがある。王を、すでに準備してあった二千余人の糾弾大会会場に連れ出した。

王は会場にあらわれると、たちまち「王祖鑿を打倒せよ」「右派分子の陰謀を砕け」「王祖鑿の頭を割れ」などの絶叫が会場一面に響き渡った。壁の上に一枚の壁新聞がはってあった。「王祖鑿は全県最大の黒幕だ。王祖鑿は紅い政権を攻撃するので、その罪を許すな。処刑せよ」と書いてあった。スローガンの声が急にとまった。革命委員会の文龍俊主任は発言した。

「王祖鑿、君は県革命委員会に反対した犯罪行為を真面目に認めよ。君はおとなく犯罪行為を認めよ。君はいつたい、党中央に対してどういう密告の手紙を出したのか。どういふふうに、われわれのこのすばらしい革命情勢を歪曲したのか」

王は十一年前から、自分の映画を守るために、ずっと我慢してきた。しかし、結果的には社会正義を守ることができなく、映画も守れなかった。いまは権力も地位もなく、党籍もない。また映画もなく、ただ道義しか残っていない。命が欲しいのだったら、持っていてもいい。彼は、この舞台を利用して十一年前に奪われた屈辱的な人格と人生を奪い返そうと決心して、勇敢に頭

を上げ発言し始めた。

王祖鑿と紅衛兵たちとの「食人行為」大論争

「はい、そうだ。告発状は私が書いた。一通だけではなく、五通も書いた。すべて親戚と昔の戦友を通じて党中央に渡した。みなさんは、なぜ書かなければならないのか考えるべきだ。三日に一回の市がある。市があれば、必ず人を殺す。人を殺せば、その肉をかならず全部、食ってしまう。これはいつたい何たることだ。文革の運動というものは、まさか食人運動であろうか。そんなことは文革を汚し、党中央まで汚した行為ではないか」

しかし、叫び声があちこち響き渡って、彼の演説が聞こえなくなった。

「王祖鑿、お前は中央に県革命委員会を誣告した。あなたは責任をとらなければならぬ」

王は反論した。

「あなたは、私の手紙を持ってくればわかるじゃないか。私はどの革命委員会の人も攻撃はしなかった。私はどの人に対しても、食人の責任を負わなければならないということを言わなかった。ただ党中央に要求して、なるべく早くこの食人行為を阻止するように要求しただけだ」

王は、会場の群衆に向かって大きな声で聞いた。

「みなさんは言ってごらんさい。いつたい人間を食うべきかどうか」

周囲は急に静かになった。このような死を恐れない勇敢な一撃は、武宣県のあらゆる批判闘争大会会場では、ほとんど見られない反撃行動だったからだ。「打倒」、「ぶち殺せ」の声が響き渡ってきた。

しかし、武宣県当局者はもうこれ以上、人を殺したり、人を食うことはできなくなっていた。王に対してもなかなか手を下せない。王は党中央と何らかのコネがある以上、万一、最高当局から王の身柄を渡してほしいと要求がきたら、渡さなければならぬ。そのため、王を殺害せずに、労働改造農場に下放することになった。

王は、再び労働改造農場に戻った。前の闘争は、彼が失敗者だったが、こんどは明らかに彼は勝利者である。彼は狂乱な食人者たちに打ち勝ただけではなく、自分にも打ち勝ったのである。王のこんどの相手は二、三十頭の牛である。しかし第一回目の労働改造のように、良心的な苦痛も恐怖もなかった。主流派にしろ、反主流派にしろ、政府役人にしろ、農民にしろ、彼のこんどの戦いに対してほとんど敬意を表し、彼と会ったたびに、つねに小さな声で「王さん、あなたは武宣県の中で最も勇敢な男だ」とあいさつされたからだ。こんどの下放は前回より一年間長く、五年間だった。五年の歳月の中で、彼は日が出ると、すぐ牛を連れて草原に行く。日が落ちると、牛とともに帰ってくる。彼は草原に上がっていくと、牛の群れは一生懸命、草を食べ、その後、牛はお互いに戯れる。牛がけんかさえしなければ、王は草の上に寝そべってマルクス・レーニン主義の原典を一生懸命に読んだ。

彼は青年時代、自分がかなりマルクス・レーニン主義を研究していたと思っただけだが、だんだんわからなくなった。いったい、マルクス・レーニン主義はどういうものであるか、彼はもう一回勉強しなおさなければならぬと思った。しかし、彼が持っていたマルクス・レーニン主義の本は、数年前にお金がなくなったとき、すでに全部売ってしまった。そのとき、王の娘が誕生したばかりで、まだひと月にもなっていなかった。お金を使うときだから、彼はやむを得ずマルクス・レーニン主義の書籍を全部売って、二十数元のお金を得て、卵を買ったり、油を買ったり、砂糖を買ったりして、妻の栄養にしたのである。

彼はよくこういうことを言っている。彼の娘は家庭の最も苦難な時期の証人である。武宣人民の苦難の歴史の証人である。というのは、一九六八年の夏、食人の嵐が最も盛んなとき、妻は妊娠した。彼らはすでに三人の子どもがいたので、もうそれ以上子どもを産まないことを決めた。そこで、県の病院に行こうとしたが、かならず市の中心街を通らねばならない。ちょうどそのときは、気が狂ったように群衆が人を縛って胸を裂き、肉を切り落としており、妻はその現場を見るとびっくり仰天して、家に戻って来る。翌日、中心街を通っても、また同じ状況で、毎日その状況をくりかえしているうちに、彼女は遂に病院に行けなくなった。そのため、この娘が生まれたのである。

労働改造農場の日常生活

マルクス・レーニン主義の書籍を売った後、読む本がなくなった。しかし牛飼いにもそれなりのおもしろみがある。手中に持っているむちは、かなり用途が多い。牛以外にはへビにもカエルに対しても使える。草原と森の中にはへビがとくに多い。へビは最初、しっぽのほうに目がついて、むちを打ち、つぎに頭を目がついてむちを打つと、すぐ捕れる。一メートル以上の大きなへビなら、へビの肉がみんなに喜ばれる。ことわざにあるように、へビ一匹はニワトリ三匹の栄養分がある。しかもへビの肉はおいしい。毒へビならもつとおいしい。だからへビの解毒薬をつねに麦わら帽子の中に入れていた。

カエルはもつと捕まえやすい。人が歩けば、すぐ動き出すので、人々は竹かごを持って、捕まえた。カエルの肉もおいしい。秋の収穫後には、牛の群れを放牧へ連れていった後、イナゴを拾うこともできる。ニワトリはイナゴが好きで、イナゴを食べると卵がおいしくなった。またネズミの巣を探すのも一つの楽しみで、草で穴をかき回し、ネズミが逃げ出してくると捕えた。その場で焼き、川に持って行って、きれいに皮を洗い落とすと、腹を裂き、内臓は肝だけ残して全部捨て、シヨウガとネギを入れて煮ると、広東と広西の人が最も好きな珍味になった。たまにネズミの巣を発見すると、十数斤の食糧と交換することもできる。まだ目をあけていない小さなネズ

ミを酒の中に漬けると、薬酒になる。このようにして、ネズミ、カエル、へビも彼の生活の中でいい栄養剤となり、暮らしの中の必需品になった。マルクス・レーニン主義の書籍がなくなった後でも、大自然の中で実に豊富にして多彩なる百科全集を得たのである。

時間が経過するのは早いもので、第二回目の労働改造もそろそろ終わりに近づいてきたとき、王はもうそろそろ牛の群れと別れなければならぬ時期が来たと思った。彼はもう一度、あの憎悪に満ちあふれた人間社会に戻って行かなければならない。彼にとって、それは新しい運命の挑戦であった。

ある日、王が放牧している最中、隊長が見えた。彼のところに新しい県委員会の江書記が来た。王が名前を聞いたら、たまたま彼の昔の部下で、王は入党のとき紹介者だった。王はすぐ手紙を書いて、こう述べた。

「ここ五年来、だれも私のところに来て、私の行為を再審査しなかった。もしよろしければ、あなたももう一度、その件について何とかお願いできないでしょうか。もちろん無理しなくてもいい。この手紙を読み終わった後、たばこの火でもいいから焼却してください」この謙遜と皮肉を兼ねた手紙が書記のところへ届くと、書記はすぐ各方面の人々を集めて会議を開き、王のことに

ついて再検討した。

間もなく、県から迎えに人が来た。彼は文化会館に連れ戻された。だれに着任の報告をすれば

よろしいですかと聞くと、あなた自身に報告すればいいと答えた。なるほど、こうして彼はもとの職へ戻ったのである。そのとき、彼はすぐ副館長に指示した。文化館のことは全部、副館長に任せる、と。その後、王はリュックサックを背負って、自分の足で村から村を歩き回り、民間から文化関係の資料の収集に努めた。どうしても忘れられないのは、あの構想中の凌十八の小説である。四年間、彼はほとんど村から村へ歩き、生産を指導し、民間の風俗習慣の資料を収集した。

ある日、村で三人の映画工作者に会った。この三人の映画工作者は文化館長にこう訴えた。毎日、同じ映画を繰り返し返して放映しても、もうだれも見に来なくなった。お金が入ってこないのもうこれ以上生活ができない、と。王はすぐこのことに関して改革案を思いついた。なるべく新しい映画を製作すべきだ。

例えば、小刀会しょうとうかいのような歴史的な物語をテーマにすれば、いい映画がつけられるのではないかと。彼はこのことをすぐ、党中央の文化部に報告した。文化部はその報告書を中央文革組に渡した。

江青こうせい（毛沢東夫人）はこの意見書を見て、彼女の革命文芸路線を攻撃することと違って大いに怒った。この意見書を出した人は典型的な反動文芸家だとし、厳しく批判しなければならぬと武宣県に指令が回ってきた。しかし県の関係者は、この指令を四カ月もそのまま処理なしにしていた。しばらくたってから、江青からまた事件処理の指令が回ってきた。いったい、王祖鑒問題は

どういうふうな処理したか。その経過について、なぜまだ報告してこないのか——と述べていた。県関係者はやむを得ず、もう一回会議を開いて、王に対する全県の大規模な公開批判会を開くことを検討した。ちょうどそのときの広西党委員会、宣伝部長などが二人とも、現在の革命文芸路線は、無味乾燥でつまらないと言ったことがあったので、王と合わせて広西の三人のピエロと決めつけ批判を展開した。しかし、そのときはもうすでに批判者が食われる心配がなくなり、文革もすでに終わりに近づいていたので、王は過去のようには恐れる心配はなく、逆に悠々自適の日を過ごすことになった。

やがて毛沢東が亡くなり、四人組が逮捕され、鄧小平が戻ってきた。文革はもうすでに過ぎ去って、武宣県も再び平静に戻った。

三中全会の後、武宣県は党代表会議の改選の席上で、食人者がまだ処罰を受けなかったばかりか、逆に県委員会の委員候補名簿に登場し、問題となった。そのとき、一部の代表は強烈な抗議をし、紅い横幕を掲げて憤然と怒って退場した。

そのとき、休暇を終えて、広州から帰り、武宣県に戻った王祖鑒も憤慨して、再び党中央に武宣食人始末記を書いて、食人事件を暴いた。この報告書は一九七八年九月二十三日付の『人民日報』の内部参考資料として、全文掲載された。衝撃波が全国を走った。間もなく、広西党委員会の趙茂助しょうぼうけん副書記、県紀律委員会書記が工作組を引き連れて武宣に現地調査に来た。武宣事件は、

いまだ闘争継続中であると、王は感づいた。

そこで文革の後、王は初めて開かれた広西作家協会第一回工作会議の席上で、作家たちの前で再び、当時の武宣で白昼堂々と人が殺され、肉が食われた事件の始末記を報告した。会場がいっせいに騒ぎ出した。それは小説か神話かおとぎ話かと思っていた。しかし、王は一つ一つ実例を挙げて説明したので、作家たちはやっとな静かになり、びっくり仰天した。その会議を取材に來た新聞記者たちも自分たちの仕事をやめて、じっくりその報告を聞いた。会議の後、作家たちは、王が武宣に帰ることを止めた。食人者たちが報復するのを恐れているからであった。

広西人民出版社、広西映画製作所、広西文学者連合会、広西師範学院はすべて競って、王がなるべく武宣から離れ、自分たちのところに来て仕事をするように勧めた。そうすれば、ある程度は彼の身の安全を保護することもできる。王は広西師範学院に行くことを決めた。彼はそのとき、まだ凌十八の小説につきまともわれ、蔵書の豊富な図書館を必要としていたからだだった。

趙茂勛は工作組を連れて、武宣県で約二十数日滞在してから南寧に帰り、広西党委員会に報告した。彼は、王はでたらめであり、彼は武宣の指導者たちを陥れようとしており、かならず王を徹底的に追及すると言いつらした。趙は王がなぜそういうふうにならなければならぬのか、食人があつたことは事実である。しかし、たつた二十七名にすぎない。絶対百人以上ということはあり得ない、と述べた。

このとき、ある古い幹部がちょうど名誉を回復して、党籍も回復した。党紀律委員会の副書記許江萍である。この人の経歴はかなりおもしろい。彼は一九二七年に革命に参加し、しかも長征にも参加させた党中央警護団の責任者の一人である。彼は延安から撤退したとき、途中で『野百合花』の作家、王実味を銃殺したそうである。その理由は、彼が逃走するのを恐れたからだだった。このことよって党から処分され、新四軍に配置転換され、黄克誠とともに仕事をした。解放後、彼は広西に來て、桂林市の公安局局長となる。その後、広西公安庁に転勤し、五十七年に広西省檢察院檢察長に就任した。そのとき、平洛地区の大量の餓死事件に対する彼の見方は、ただ地方委員会では処理するだけではなくて、党委員会もその責任を負わなければならないということで、その見方が問題になって、右派分子と決めつけられ、労働改造をされた。労働改造の後、広西省に來て、守衛になった。

文革後、ある全国的な紀律檢察委員会書記会議の席上で、中央規律委員会の黄克誠書記は、広西省武宣の食人事件に対してどういうふうにならぬかという報告について、その場で説明するように許江萍を指名した。彼はそのとき立ち上がって言った。

「上官に報告します。私は二十数年間、党籍が剝奪され、復職してから十数日しかたっておりません。私はあまり状況に詳しくない」

黄克誠は自分の昔の部下であるということも考慮しながら言った。

「わかった。それはあなたの責任ではない。しかし、この件について、あなたは徹底的に調べてから、もう一度私に報告をしてください」

許はそのとき恥をかいたような気がして、承知しましたとだけ言って、何の返事もできなかった。

許は広西に帰ってから、郭明文化局長らに文句を言った。「私は実に運が悪い。一生涯、なかなかうまくいかない。ちょうど職にもどったとき、また難題につきあたった。よかったのは、黄克誠は私の昔の上役で、ある程度の面子を残してくれた」郭明はにこっと笑って、「この件に関しては、あなたは王祖鑿を頼まなければならない」と語った。許はその後、師範学院に来て王と会い、長い話の結果、許は王に問い詰めた。「いったい、百人以上食べられたというのは、本当ですか」王はこう答えた。「あなたは一人一人、確実に調べてみればよい。もし一人でも間違えば、私は党から除名されても構わない。しかし、もし一人でも余計に出たら、それは趙茂勛が責任を負わなければならない。党中央に頼んで調査団を派遣して、広西省当局と一緒に合同調査してもいいじゃないですか」許はその後、もう一度調査して、その結果を上役の趙茂勛の頭越しで、黄克誠に直接、報告した。

その後、黄克誠は中国共産党中央に報告書を提出し、しかも鄧小平、胡耀邦、趙紫陽など首脳陣に報告した。趙茂勛は王が北京に行っているとき、広西で大々的に噂を流した。王が廈門に行

って、文芸会に参加し、しかもひそかに隠れて食人の長編小説を書いているなどと言いふらした。王は北京から広西に帰って来たとき、すでに噂がたつて、政治的な迫害から人身攻撃に変わっていた。王はまわりの圧力にととう弁明することもできなくなり、五十七歳未滿で強制的に引退させられ、強制退職させられたのである。

一九八三年の春、王と広西の民衆の頑強なる戦いは遂に成果があらわれてきた。広西大虐殺の元凶、文化大革命の最後に残った大物、韋国清は遂に党中央から配置転換させられ、広西から離れざるを得なかった。広西省党委員会は徹底的に再編された。文革慰留問題処理運動は迅速に展開され、数十万の被害者はやっと名誉回復となり、謎に包まれた広西文革は遂に明らかになった。広西省は、もともと全国唯一、文革路線を正確に実行したのだが、特別に残酷な人間地獄であったということも明らかになった。この「特別に残酷、残酷な」という言葉は『広西日報』の社説である。

私は毎日、取材が終わると、妻とともに王の家からゆっくりとホテルに帰り、いつも感激していた。王祖鑿はさすが男である。英雄だ。彼は人生の中で暗黒な面と出会ったとき、決して回避はしなかった。命を捨ててまで正面から向かい討つ。彼は共産党の暴虐な政治的圧力の中で、現代の知識分子の中で、確かに抜きん出ている。すでに知識分子としての理想主義精神の悟りの境地に達している。もちろんそのこと以外に、われわれはどうしても、彼が普通の人と違う出身で

あるような気がした。彼は出身（経歴）について聞くと、にこつと笑って答えた。「私の人生の中で差し迫ったときには、確かに先輩たちの性格と共通のところがある。ただ、それはひよっとした歴史の偶然かもしれない」

残念なことに、彼はわれわれに詳しい出身を教えてくれなかった。

王家三代の人々は、社会主義革命の先頭を歩いてきた

その後、私は羅定県の事務所で、ある資料を発見した。それは王のふるさとと彼の父親と祖父に関する資料である。王のふるさと、羅定県は広東省でも最も貧しいところで、軍閥時代には、この県の男子の人生はただ二つの道しかなかった。一つは匪賊になるか、もう一つは兵士になるか、この二つしかなかった。中華民国の初めごろ、この県から一人の匪賊出身の英雄が出た。蔡廷楷である。彼は間もなく政府に帰順して、師団長、指揮官までなった。彼の率いる十九路軍は、隊長以上がすべて羅定出身の間である。抗日戦争のとき、彼は民族の英雄になった。

王の祖父、王克忠は広東省羅定県の出身で、二十一歳のとき、科挙試験で首席を得た。ふるさとに帰ってから十三年間教えた後、北京へ赴き、教師として、法政学堂——北京大学の前身に入り、民国以後は最高裁判所判事に就任した。王克忠の一生の中で最も輝かしい業績というのは、五・四運動時期の第一回の裁判である。一九一九年五月四日、北京の学生はデモ行進して、売国

奴の名を叫び、焼き討ちした。北洋軍閥の軍当局者は千名近くの学生を逮捕し、当時の總統徐世昌は逮捕した学生を最高裁判所に引き渡した。そのとき、王克忠は五十歳ちよつとぐらいで、みづから裁判所に出て、五・四運動の判事となった。両方の弁護士が激論した末、王はその場で愛国無罪と判決を下し、全員を釈放した。そのとき、徐世昌總統は大いに怒った。しかし憲法では三権分立と決められているので、やむを得ず、王を黒龍江省の高等裁判所の院長に左遷し、一方、王は憤然と辞職を提出した。最高裁判所内では不平不満の声も出たので、やむを得ず、天津地方裁判所裁判官に転出させた。

王の父、王紹輝は一九一三年、北京の高級小学校を出て、結婚三日目からフランス留学し、リヨン大学で鉄道技術を勉強した。当時、呉玉章、李立三とはクラスメートであり、その学校の中国学生会の副首席にもなった。帰国後、王紹輝は北京で中国政法大学に教職を得たが、数カ月後、再び公費でヨーロッパに留学した。そのときはベルギーのルボン大学に橋梁の技術を専攻した。

一九二三年卒業、帰国。黄河大鉄橋の修築の功績で、工務課長になった。

日中戦争期間中、紹輝は政府の命令を受けて、工程大隊千余人を連れて、広西省の南寧からハノイまでの鉄道を建設した。また、解放後、武漢の長江大橋建設に参加した。周恩来は中南海で中国の有名な橋梁建築家を集めて、ソ連専門家の設計図を検討した。王紹輝はそのとき、大橋の

安全問題に対して異議を述べた後、レニングラードからの数千トンの特殊鋼材の輸入に反対して、ソ連専門家の建設団団長と激論した結果、周恩来はその工事について、王紹輝の案を採用した。

一九五八年、王祖鑿と彼の弟、王祖鏗——彼は当時、広州市政府委員会に勤務していた。二人とも右派分子と決めつけられた。当時、王紹輝までは処分は及ばなかったが、内心ではとても言いがたい苦痛があり、高血圧の持病もだんだんと重くなった。広州市人民代表大会の出席台で大会報告を行なったとき、急に倒れて、一九六三年に亡くなった。享年六十八歳であった。

王家三代は現代中国の現代史を歩んできた。中国人民の反帝国主義、反専制主義の民族民衆革命の中で、三代とも清廉潔白で、人々に尊敬されるべき一家である。これは歴史としては忘れてはならない人物であり、歴史としては忘れるべきではない家族である。しかし、私はいくら考えてもどうしても不思議なのは、なぜ王は自分の家族と自分の歴史を書かなかったのか。このような歴史はすでに一つの長編小説のテーマになるのではなからうか。また残念なのは、彼は絶対、武宣事件について書かないことだ。彼は一九八八年六月十八日の手紙の最後に、そういうふうにして書いた。

彼は北京に帰った後も、もう一回、書留で手紙を私にくれた。

「あなたはこんど武宣に來たのは、このテーマを書くためではないか。しかし、もうすでに二十年が過ぎ去ったので、果たしてそれを文芸作品の中に入れる必要があるかどうか。私は中央の意

見はどうかわかりませんが、私本人としては、今日に至って、それを書く気持ちは全くない」

これは彼がくれた手紙の一節である。王のような者でさえ、このような率直な真面目な知識分子でさえ、屈原くわんのような忠君愛国の情緒を、伝統的な価値観を打ち破ることができなかった。それはまさしく中国の文人の最大の悲劇ではなからうか。彼らは命を賭けて邪悪と戦うことがあっても、しかし「神聖なる君主の邪悪」が目の前で行なわれているとき、逆に彼らを正視することができず、見つめることができず、みずから前進することをやめた。

一九八八年八月十八日の手紙の中で、王は珍しく二つのことを書いた。手紙にはこう書いてあった。

「私の四人の子供たちでさえ、よく、おやじはあまりにも真面目すぎる。純粹すぎる。子供らはずっと両親二人に対して、二人の党に対する態度はどうしても理解できないといていた。組織は何回も私たち二人を再入党させることを考えたが、しかし今日に至って、だれも入らなかつた。しかし、私たち夫婦二人も、最近の若者に対してはどうしても理解できない」

ひよっとしたら、「天安門事件」の血は、彼らにとって、やっと次の世代の気持ちをわからせたのかもしれない。あるいは彼らはいまだ人生哲学と現実生活の中の激しい激突と苦痛の中でもがき、苦悩しているかもしれない。いずれにせよ、彼はすでにやるべきことをすべてやり通してきた。同じ年代の共産黨員の中で、彼は一人のたたえるべき人物であり、人間らしい人間である

に違いない。それぞれの世代はそれぞれの使命がある。彼がやり遂げなかったことは、私がかわりにやってあげなければならない。私に任せるべきではないだろうか。



広西チワン族自治区を取材する著者・鄭義

5章

マルクス主義と孔子^{こうし}

●マルクス主義は、中国人の苦難の上にさらに苦痛を与えた

孔子思想は、独裁政治の基盤だ

ここでもう一つ、大きな問題を提起しなければならぬ。なぜもつとも残虐な毛沢東式全体主義が東方の中国で生まれたのか。ここで検討したいと思う。黄河は中華民族の父なる川である。黄河は東アジア大陸の心臓部を貫通し、豊かな水量で大地を潤わせ、早熟な農業文明をつくり、しかもその文明の運命を規定した。

ヘーゲルの『歴史哲学』では、民族精神の誕生について地理的基盤から、三つの地理的環境に分けている。一番目は乾燥した高地と広大な草原。二番目は巨大な河川が流れる平原流域、三番目は海岸地帯である。彼は、第一種類の地理環境は友好と略奪の民族性を育て、二番目の地理環境は保守、孤独の民族性を育て、三番目の環境は勇敢と沈着と機知を育てるとした。明らかに黄河流域は、第二番目の地理環境に属している。

水は農業の命脈である。この水の周辺の共同生活は、個人を犠牲にして、団体に奉仕する精神を育てて、文明思想の中核になった。水との長い闘いと、その生活は多くの伝説を生み、大禹治水の伝説は明らかに水害と水利の、つまり水との闘いの生活を反映し、その生活の問題点をあらわす。そこで水に対する制御は、実質的には、氏族国家の統治になり、治水の英雄こそは帝王になった。

群衆の求心力の中心は、家長、氏族の共同の祖先から、だんだんと氏族国家の首領となった。

黄河は、巨大な水利と同じく、巨大な水害を中華民族にもたらし、稀に見る巨大な求心力を形成し、しかし、そのマイナス面では、東方の専制主義に対して内からも擁護する精神を育てたのである。このような世界に希に見る種族と種族の間の求心力は、必然的に世にも希に見る熾烈な種族戦争を生じた。だから、炎帝皇帝主従、あるいは堯、舜、禹、彼らは古来の併合戦争の専門家である。大規模な戦争の結果、政治、軍事の権力はますます集中した。禹のとき、天下は万国あった。しかし、殷・商の時代になると三千余国、西周の初めごろは四百余国が封じられ、征服された国は八百余国。周の武王だけでも九十九カ国を征服し、五十カ国を滅ぼした。戦国時代には七雄が存在し、秦の始皇帝のときに、東アジア大陸は初めて天下統一されたのである。

長期にわたる大規模な戦争は、必然的に権力の集中をもたらした。このことは、殺戮によって政治的統治の権力が、すべての社会の上に凌駕することの証明である。それぞれ違った氏族、部族の独立性を喪失させ、個人も政治権力の奴隷に転落したのである。

中国の古代史は氏族国家の征服史ではなく、一部の個人の征服史でもあった。君主はこのように絶えず拡張しつつ、血みどろの、血なまぐさい歴史の中で、ますます大きな政治権力を握り、個人はますます多くの政治的自由を失ったのである。

紀元前五五一年、中国は一人の偉大な思想家、孔子を生んだ。彼の政治文化は、この原始的な東方専制主義を、大河流域の原始農業の経済文化、血縁相続制度の社会文化および併合戦争の政

治文化、理論的文化にまで昇華させ、いわゆる儒教をつくり出したのだ。それが、中華民族の二千年にわたる文化になったのである。

孔子は各国を周遊して、動揺し始めた旧社会を再建すべきだと遊説し、礼を主張した。系統化、規範化された、祖先崇拜を核心とする政治的制度と、血縁的家父長制を基礎とする厳格な階級制度である礼を主張した。

また孔子は、礼を再建するために、さらに進んで仁をも主張した。孔子が主張とする「仁」というのは、人間と人間の関係、人間と社会の関係を規定する倫理的主張である。ただ仁はキリスト教が言っている人類の普遍的な愛ではなく、血縁関係の基礎であり、人間の親疎関係、上下関係などの階級制度を規定する道德規範である。つまり孝と忠の価値である。既成体制に忠実で、自分を犠牲にする価値である。孝というのは、宗族の縦への関係を維持し、弟の価値は宗族の中の横の関係を維持して、氏族国家の統治目的を達成する道德的規範である。

このような血縁関係から築きあげられた政治的社会的階級制度は、すなわち儒家思想が提唱する「修身、齊家、治國、平天下」の中国古来の統治術である。そこで国家というのは、家から拡大したものとなり、「家國一体」、「家天下」の思想が生まれた。

統治者は、厳しい父とやさしい母のように農民を管理しなければならない。しかし、農民は孝順の道德的規範にしたがって、父母に孝行するように、統治者に絶対、服従しなければならない。

このような暴虐の政治に対抗するための道德政治は、個人と集団、非統治者と統治者の間で、必然的に存在する矛盾と衝突を温情主義の中で解消しようとする。ある意味では、社会的矛盾を緩和し、当時としては鮮明な人道主義的色彩を持っていた。しかし、個人の目覚めを抑圧し、しかも階級制度を固定したために、中華民族二千年の専制政治の理論的基礎になったのである。

孔子は在世の時代、自ら彼の仁学の実践したが、その影響はそれほど大きくなかった。しかし、孔子が仁学思想を血縁的家父長制度にまで昇華させ、政治的統治のモラルにし、しかも個人個人の自我の道德規範に内面化させてから、中華民族の政治、文化的伝統になったのである。

孔子は中国人の個性を抑圧し、悲惨な社会をつくった

このようにして、孔子の仁学思想はほとんど中国の歴史的方向を規定し、東方の専制主義となった。このような専制主義思想の体系は、歴代王朝の帝王に尊崇された。早くも西周、漢の時代から唯我独尊の政治思想として、国教的地位を得た。中国の歴代専制独裁帝王で、孔子を尊敬しない者はいなかった。少数民族が中原に侵入し、漢民族と戦っても、いったん天下を取れば、例外なく孔子を尊崇した。蒙古族の皇帝、元の成宗は、宋王朝が孔子を「至聖文宣王」を封じた基礎の上で、さらに「大成至聖文宣王」を封じた。満州皇帝、清の世祖、順治皇帝は、明が孔子を「至聖先師」の基礎の上に、さらに「大成至聖文宣先師」と封じた。孔子に対する尊敬は、前王

朝の漢族の皇帝よりも尊敬した。乾隆皇帝は八回も聖地の曲阜きんりくふに行つて、孔子を祭つたほどだ。皇帝制度を打倒した辛亥革命の後でも、袁世凱は帝制を回復するために、總統の身分で孔子を尊崇する政令を發布し、孔子を祭り、典礼を制定した。これはいったいどういうことを意味するかというと、孔子は、東方の独裁専制主義思想体系を創設した開山の元祖であり、儒学は長期にわたつて実行された結果、まことに有効な専制統治の技術となつたのだ。しかも儒教は世俗化と政治化した準宗教である。孔子は、人生に対して深刻な誤解があつた。仁をもつて、暴に抗する儒教は、遂に政治的には専制独裁政治の基礎をつくつただけではなく、精神的には、中華民族の自我を抑圧する普遍的な人格もつくつたのである。

人類史上、中華民族ほど個性が抑圧され、悲惨な非人間的な状態になつた民族はなかつた。もつとも、注意に値するのは、このような抑圧は完全に外的規範からくるものではなく、儒教思想の麻痺のもとで、自発的に生まれた個々の内面的な自我規制である。ことに極度な自我の抑圧は精神的な異常をもたらし、人類の集団的自我に対する抑圧も、往々にして精神的な異常、つまり文明的な、文化的な精神異常をもたらし、つたりとあり得た。

例えば、中国では、大一統の政治、大一統の経済、大一統の文化、あたかもすべての個人がそろつて同様な病的な環境をつくり出した。その対照的な正常な環境は西洋である。中国の先民は剛健な、陽気な、自由奔放な民族であつたが、この専制独裁の文明の抑圧のもとで、だんだんと陽気、剛健な性格から、陰湿、柔弱に走り、周期的な社会の大動乱の中で、また再び陽気と剛健な氣風が生まれ、爆発してから、また陰湿、柔弱に変わったのである。

もし、フロイトの表現で言えば、儒学の道徳的規範である「天理」は超自我であり、極度に人間性を絶滅、個人の個性と生まれつきの、欲望を抑圧し、中国人すべての情念と欲望の喪失をもたらした。しかし、自我と超自我はちがつて、エネルギーは強大で不滅である。この抑圧された心理はだんだん凝集され、マグマのように爆発してくると、中国社会の周期的な大動乱、農民暴動になる。政治的抑圧と経済的搾取は、農民暴動の社会的要因になる。潜在意識の狂乱は農民起義の心理学的動因になる。長く抑圧された欲望の噴出は、無意識に対象を探さなければならぬ。だから、昨日、仁義道徳を守り、三綱五常の倫理的規範を守つてきた順民は一瞬にして死を恐れず、騒乱の暴民になつたのである。たとえば、「内聖外王」「仁政」「徳治」の「君父」及び大小の「父母官」はすべて農民を圧殺する暴君に変貌したのである。このような狂乱の災禍の総爆発の中で、多くの政治的にも、軍事的にも不必要な残虐現象があらわれたのである。例えば、黄巢、張献忠のような殺戮。五代の軍人のような人食い。それはすべて、そのような心理的狂乱と集団的精神異常からくるものである。

中国社会のこのような周期的な狂乱、残虐な殺戮は、ただ権力者の個人的な精神錯乱からくるものではなく、それは集団的無意識の狂乱と解釈することもできる。政治学的角度から見ると、

儒学は独裁専制の理論であり、もちろん圧迫は必然的に反抗をもたらしものだ。心理学的角度から見ると、儒学というものは、自我抑制の理論である。「天理を尊ぶ」、「人欲を拒む」という大きな抑制は、往々にして大爆発を引き起こし、極端な道徳は往々にして、極端な不道徳に変わる。人間性に対する深刻な誤解から、儒学は人間性の抑圧によって社会矛盾の解決を図った。そして、大一統、つまり天下統一の専制政治の仕組みをもって、社会の永久的な安定と統治を図ることは、結果的には、二十世紀にわたる狂乱的な社会をつくった。

以上、総合的にまとめて言えば、大河流域の経済地理と大規模な併合戦争は、中国史前の社会専制主義政治構造をつくった。中国歴史の幼年時代において、孔子はこのような、当時としては相対的な合理的政治構造を一種の万古不易、永遠普遍な絶対真理に昇華させ、超安定的政治、文化、心理の原形にし、したがって、歴史の方向を決定せんとした。それこそこの東方専制主義の秘密であり、同時にまた東方の凶暴と動乱の秘密でもある。

マルクス主義は衰退しつつある儒教に新血を注いだ

では、伝統的な専制主義は、なぜその集大成である最高形態の極権主義、全体主義に発展したか、なぜ、伝統的、周期的な暴虐は、激烈な持久的現代の暴虐である無産階級専制、つまりプロレタリア独裁に発展したのか。もちろん歴史的な慣性、人間の惰性が一因だということがいちば

ん頼りになる解釈であらう。それ以外には、マルクス主義思想も一つの原因である。初歩的な研究から、私はマルクス主義と儒教は似ていると思っている。マルクス主義は衰退しつつある儒学に新血を注いだのである。なかなか信じがたいことではあるが、しかし残念なことに、これは事実である。歴史とは根源的には人類個人の活動である。歴史を推し進める原動力は個人生命の生存闘争であり、また、それは個人と自然、社会との矛盾、自我と非我との矛盾である。これらの矛盾を理解するうえで、マルクス主義は、まず以下の二つのところで儒学とよく似ている。

第一、人の本質とは何か、第二、歴史の本質とは何か、という点についてだ。「個人は歴史を創造する」という公式の中で、主体的な人間である「個人」は、もちろん重要であり、そこで人間性に対する認識は疑いもなく、すべての哲学の基礎になる。フロイトの精神分析学以前には、このような人間性の内部的衝突はつねに善と悪の矛盾として表現される。自称、人類解放の学説であるマルクス主義は、この人間性の、その人性の善悪に対しては、確実な回答をしなければならぬ。しかし、いくらマルクスのすべての著作を探しても、基本的にはこのような確実な回答はなかった。ただ、理論的マルクス主義と、実践的マルクス主義の教典の中で、よく引用されているこのような話がある。

フォイエールバッハは、宗教の本質は結果的には人の本質である。ただし、人の本質はただ個人が持つ抽象的なものではなく、現実的にはすべての社会関係の総和であるとする。この人の本質

についての教典は、人性の善悪の問題については回答はしていない。マルクスは直接に人間の本性について善悪を提起せずに、ただ間接的にこの問題を答えるだけである。ではなぜ、彼は直接人間の善悪問題についてを回答しないのか。それは、彼が善悪の問題に対して明確な立場がなかったからであろうか。

マルクスが、歴史的主体である個人を捨象して人間の本質を社会関係の総和と規定したのは、それは徹底的に唯物主義体系の純粹性を保つためである。マルクス主義の理論の出発点は労働である。もちろん、それは人間の労働である。そのために、人間の存在が消失した。彼の厳密にして膨大な体系の中で、労働、物と物の関係は研究の対象になり、人間は社会関係の産物になり、理論背景の中のぼんやりした幽霊になった。彼らの理論体系のなかでは一回も人間、個人のこの現実的な歴史的主体を把握することがなかった。体系の純粹性を保つために、マルクス、エンゲルスは絶対、人性を口にしない。たまに提起しても、きわめて巧妙である。

われわれが知っているのは、われわれの時代に、人間の問題はあたかも恐ろしい幽霊のようにずっと実践的マルクス主義国家につきままとっていた。われわれがまだ知っていないのは、理論的マルクス主義の時代において人間の問題はマルクスにとって同じように見逃せない大きな課題であったことだ。

すべて生命あるものは、強烈に自己保存を追求し、絶えず自己満足を追求するものだ。それは生命の最大な前提である。人間は動物の祖先からずっと今まで、少なくとも二百万年以上積み重ねてきた原始的な欲望の歴史がある。この短い幾世代だけでは、幾十世代だけの時間でもそれを変えさせることはできない。もし、ある日、それを徹底的に変えさせなければならぬとすれば、自己満足を他人の満足に変えさせ、すなわち共産主義社会の普遍的道德である「大公無私」の社会に変えさせることである。それは生命が自我の実現から自我の壊滅に走らなければならない。それは人類の終末である。

マルクスに言わせると、マルクス主義の唯物論的基礎原理は、社会存在は社会意識を決定するものだ。しかし、社会意識と人間性は違う。社会意識というのは人間の理性の一部にすぎない。社会意識をもって人間性を変えさせることは無理である。これはマルクス主義の一つの大きな理論的誤りである。社会存在と、社会意識とは、社会発展を決定する一つの矛盾である。事実が証明するところでは、ここ数千年の人類の文明史は、社会形態が迅速に、しかも激烈に変化しても、人性の変化は基本的にきわめて微小である。社会意識は人間性を変化させることはできない。人間の理性（知識、認識能力）が変化しても、人類の非理性（欲望、感情、本能、意思、直感）を変化させることはできない。基本的には変化できなかったのである。フロイトが言っているように、数世代の人間の時間をもって人類の性質を変えさせることは全く不可能である。

唯物主義体系にもとづいて、マルクス、エンゲルスは絶対、人間性の善悪を討論しなかった。

もちろんそれは、彼らが人間性の善悪に対して見解がないことではない。少なくとも人の善悪の問題について、マルクス、エンゲルスは以下、三つの見解と態度をとっている。

一つ、これは観念論の問題である。討論する必要はない。そして、人間の本质とはすべての社会関係の総和であるという、唯物主義の命題にとつてかわれる。社会環境が変われば、私有制度が廃止をすれば、人間性は自然的善になる。

第二、真つ正面からその問題を取り組まなくても、彼らの理論の中では、ときには人間性は善、ときには人間性は悪、ある場合によつては、人間性というのは善悪の対立的統一の矛盾である。もちろん、それは善悪の弁証法的見方である。

三番目、共産主義の思想的体系の出発点は、人間性は善から出発するに違いないとしている。というのは、共産主義は空想的から科学的にいたるまで、初期の資本主義から生まれた社会的罪悪に対して、一貫して道徳的な批判を行ってきた。もし人間性は悪であれば、ではなぜ資本主義に対して、ことに私有制度に対しては、なぜあれほど徹底的に批判しなければならぬのか。それは、人間性は善であるからだ。共産主義思想の体系は潜在的に、「必然的」、認識の基本はそこにある。

共産主義の目的は、人間の善良な天性への回帰である。この点が十分に重要である。人間性は悪、あるいは善悪備え持つものであることを承認すれば、ではなぜ一切の現存制度に対してあれほど徹底的に批判しなければならぬのか。だから潜在的な、論理的な面から見ると、人間性は善である。しかも労働者階級は歴史的進歩を代表する階級であり、すべての階級を徹底的に解放する代表でもある。共産主義の理論体系は潜在的に労働者階級が善を代表することを肯定する。労働者階級が絶対的善を代表することを意味する。

また、労働者階級の前衛である、共産主義は絶対的善である。共産党の指導者も自然的に人生の至善の化身になりかわる。至善の者は、人世の大権を握ることはきわめて合理的である。しかも懷疑を許さないため、監督も必要としない、それに相互索制する制度も必要としなかった。そのため現代の極権主義を導いたのではないか。これこそマルクス主義を実践する労働者階級の名において、全体の国民に対して暴虐な専制を實行する理論的根拠ではなからうか。

性悪論は少なくとも、性善論に比べ深刻な自省の意味をもつ。「原罪説」はキリスト教の中ではそれなりの重要な意義を持つている。すべての人間は生まれつき原罪を持ち、性悪的であれば、かならず私利私欲がある。だからすべての個人は至善に到達するのは不可能である。それなら、すべての人間は、つねに罪を犯す可能性があり、しかも他人の権利を侵す可能性もある。同時に、すべての個人は他人の権利を侵犯、他人から権利を侵犯される可能性を持つ。他人の権利を侵すことを防止するためには、権力に対して監督、監視をしなければならぬ、とする。それこそ、西洋近代国家の多党性、三権分立の思想的基礎である。

人間は生まれつき善であるという見方は、儒教思想の本流である。漢の時代の儒学者、董仲舒は、人間性は天から来るものと思われ、人間性に三品あると唱えた。聖人は生まれつき、性は善である。小人は、生まれつき悪である。その中間のいわゆる「中人」は善にもなり、悪にもなる。これは十分に、露骨な独裁専制の理論である。

もちろん中国の歴史上では、荀子のような性悪論を唱えて、儒教の正統思想に反抗する思想家もいるが、強大な官僚哲学の攻撃のもとで壊滅し、儒学の性善説はずっと中国人間性論の正統思想になった。だから儒学の性善論は終始、中国官界の人間性論になった。それは中国の専制独裁制度の重要な理論的根拠である。そのため、性善説は権力の監督と権力の牽制の必要性を否定し、しかも家父長制、階級制度とともに、二千余年にわたる独裁専制政治の伝統社会をつくつたのである。

マルクス主義思想は、ヘーゲル及びその宗教的歴史哲学を批判したが、不幸にして彼らもその轍を踏んだ。しかも、彼の歴史目的論はヘーゲルよりもさらに過ちを犯していた。およそすべて社会主義体制下で生活した人々は、みずからの体験で、社会主義体制は貧しく、しかも残虐であると感じたはずである。もちろん、そこで批判しなければならぬのは、歴史的発展の終点はまさしく反弁証法的なもので、それはヘーゲルばかりではなく、同じくヘーゲルを批判したマルクス主義思想にもあらわれている。

われわれが今まで読んだ社会主義社会の生存闘争の終焉とは、競争が停止した、階級が消滅した、政党が滅亡した、国家も絶滅した、一切の人類の罪悪も影を潜めてなくなつたものであろう。そこで人間は徹底的な自由、完全な平等、すべての人はみずからの能力に応じて働き、みずから必要に応じてものを獲得する。労働こそ最大の人生の幸せであると見られ、すべての人が欲するものは難なく、自分の回りに飛んでくる。これはいったい何だ。これは天国が、地上でエデンの園になつたのである。それが一つの歴史の終末論である。

中国の歴史哲学にいたっては、厳格に言えば、西洋の歴史哲学に比べ、比較的貧困である。哲学というのは、生活の抽象的なものだが、しかし中国は二千年來、その歴史はきわめて停滞している。だから歴史哲学に対して、それなりに咀嚼したものを提供することができなかった。だから天は不変であり、道も不変である。儒家思想から構築された厳密にして、安定な君主独裁制度は、中国の歴史発展の妨げになつたのだ。

ヘーゲルは彼の『歴史哲学』の中で、中国はただ空間だけがあつて、時間はない。つまり、歴史はなかつたということを描いた。中国の歴史は、絶えず農民の戦争と、絶えず易姓革命による王朝の交代だけである。王朝が変わるたびに、いつも血なまぐさく騒々しい。しかも、「一治一乱」の歴史循環を脱出することはできなかった。だから、中国の歴史哲学というのは、ただ「一治一乱」の循環論にすぎない。

しかも、すべて「一治一乱」の歴史循環を脱出することはできなかった。中国古来の思想家は、このような治乱の循環現象に付和雷同して、五徳循環説を唱え、すべての歴史は金、木、水、火、土の無限なる循環にすぎないと唱えた。古来の周人が殷人の統治を受け継ぎ、天命な思想に基づいて、圧迫を加えたとき、殷人はこういうふうな反駁している。

「天帝云々するのはおかしい。この世界をつくったのは、ただ金、木、水、火、土の五つの元素にすぎないのではないか」

春秋時代になると、社会思想は大きく動き変わった。そこで、中国の最初の大歴史学者、孔子が出てきた。彼の主な仕事は、古来の殷、周の古典を集め、両王朝の文物制度を擁護し、再建をはかることだった。孔子自称「われ述べて作らず」、殷、周時代の天道思想は、孔子の思想に反映し、天道を承認するが、しかし天道を口にしなかった。

紀元前二世紀末の漢の武帝の時代になると、鄒衍（そうえん）は「五徳循環」説を変え、いわゆる「五徳」の「五帝」の上にもう一人、それを統率する「太一」という至上の神、万物を主宰する至上の神をつくった。漢武帝の時代の董仲舒（とうちゅうじよ）は、世間一切のものを至上の神、人格神の目的ある予定のもとでつくられたものと唱え、王権神授説の理論的根拠となった。彼は、殷、周時代の孔子の天命思想を継承し、五徳循環説まで発展させた。

漢の時代になると、すでに比較的完全にして、緻密な目的論的歴史循環論が形成された。それが形成された時期は約千年にも達した。しかし、それ以後、二千年の長い歲月の中で、この「いにしえを法り、天に奉る」、「天は不変であり、道も不変である」という歴史循環論は始終、中国の歴史哲学の主流になり、中国社会に大きな影響を与えた。

マルクス主義と中国土着の「大同思想」の共通項

表面的に見ると、このような伝統的歴史循環論と外来のマルクス思想の共産主義歴史哲学では、似ていないような面もある。というのは、一つは、自己完結的、循環的、閉鎖的歴史観であり、もう一つは、螺旋形的、発展論的、開放的歴史観という点である。しかし、本質的には、人本主義か、歴史実体主義か、あるいは人道か、天道かという面では、それは対照的なものである。儒学的歴史主義とマルクス主義歴史哲学は、すべて歴史主体主義、すべて天道を語り、すべて歴史の本質が、歴史的存在に優先することを語る。すべて歴史的本質（つまり天道、規律）を求めるために、歴史的存在（つまり人間の現実的生活）を犠牲にすることを求めるのである。この共通点は、言うまでもなく、中国人がマルクス歴史哲学を受け入れた思想的土台でもある。

もちろん、それ以外にも中国の土着の空想的社会主義である「大同思想」とマルクスの科学的社会主義もきわめて類似する一面がある。大同の思想はほぼ西洋の空想的、社会主義的ユートピアに似ている。大同の言葉は、キリスト誕生よりもはるか前の儒家の古典、「礼記」礼運篇に

出ている。これは孔子が描いている太平の盛世にある社会である。その社会は私有制度がなく、人々は私有財産を持たない。人々は公益に努力し、働く。青年は自動的に社会的責任と義務を負い、児童はすべて社会の教育を受け、弱者などは社会の世話を受け、人々は互いに愛し、相互扶助をし、公共の職務に対しては有能な人材を選び、それを担任させる。社会には陰謀もなく、詐欺もなく、窃盗もなく、犯罪はすべてなくなる。生活が安定し、夜中にドアを閉めなくてもよい。こういうふうに書かれている。

これは一つの原始的共産主義社会であり、理想化された今世の天国である。二千余年来の伝統社会の中で、このような歴史的哲学と歴史的現実とは、人々に大きな夢をもたらし、暗黒社会の中で、大同の世界は唯一、遠いところから漏れてくる一線の希望の光であった。だから、多くの現実に対する不満、苦難の循環の中から脱出せんとする先進的な人物は、すべて大同の世界を自分の歴史的理想と見た。なканずく、最も有名なものは、太平天国の指導者、洪秀全、資産階級維新派の代表、康有為、資産階級革命派のリーダー、孫文がそのような人々である。

大同思想と共産主義には不可解な因縁があった。太平天国革命の時期、従来、中国に対して関心の少なかったマルクスは、「平等」を唱える大同式空想社会主義に対して、中国的社会主義として評価し、熱烈にそれをたたえた。

儒教とマルクス主義の歴史哲学のうえでの共通点は、中国人が共産主義理論を受け入れる基礎

となり、地上の天国思想である大同思想と、同じく地上の天国である未来の共産主義社会とを二重写しのように見る点にも見られる。そこで二千年にわたる中国人の歴史的悪性循環の中で苦しんできた中国人に大きな希望を与えた。とくに毛沢東は、この地上の天国はすでに近くにあり、手で触れることができると言ったので、中国人はいっそう熱狂的な情熱にかられ、すべての経済的搾取、すべての政治的恐怖に対して善良に理解をし、そしてそれを受け入れた。同時に、統治者のすべての暴虐と不義は、共産主義によって道徳的根拠を得たのである。

人間をただの生産の道具にしか見ないマルクス主義の歴史的哲学は、歴史に虐げられてきた中国人の苦難の上にさらに加えられた苦痛である。

個人が歴史を創造するという法則の中で、マルクス主義思想と儒家思想は個人に対して、歴史に対しても見方は一致する。われわれはこの公式をさらに多くの角度から見れば、社会学の領域にもマルクス主義思想と儒家思想が一致していることを見ることができる。政治権力の学的な領域の中でも、この問題はマルクス主義思想と儒家思想が互いに呼応して、類似しているところが多い。

民主と独裁の視点から見れば、儒家思想とマルクス主義思想は一種の専制政治の理論体系である。両方とも権力の総合相互牽制を語らない。というのは、彼らの政治的理想の中で、すべての権力というものは絶対的真理を代表するからである。儒学のほうでは王権天授、王権は天から授